



越
前
若
狭

あかしびと

歴史の証人

— 越前・若狭の 戦国の城 —



歴史の証人

— 越前・若狭の 戦国の城 —



平成 29 年度文化庁文化芸術振興費補助金
(文化遺産を活かした地域活性化事業)

編集・協力/福井県
発行/「戦国ふくい」の文化遺産活用実行委員会
(一乗谷朝倉氏遺跡活用推進協議会内)
発行日/平成30年3月

朝倉氏の5代1033年は 統治・防衛に優れた 城下町とともに

戦国の城として、今もその跡を確認することができる
一乗谷(福井市城戸ノ内)では、当主が生活の拠点と
した城Ⅱ「館」を中心に、家臣たちの住まい、寺院、
町屋などが建ち並び、1万人が暮らしていたとも言わ
れている。当主の館の背後には、有事に備えた詰城Ⅱ
「山城」が整備され、城下町の周囲の山々の山々に、
防衛拠点・支城が築かれていた。城下町の外には、
人々の暮らしを支える商業地があり、当時この一乗谷
一帯は全国有数の大都市であった。

城 No.2 一乗谷城 (福井市城戸ノ内)



千畳敷(せんじょうじき)、観音屋敷、月見櫓などの方形区画群、一の丸、二の丸、三の丸という連続曲輪群などが地形を利用して造られ、広範囲にわたって配置されている。空堀、堀切、土塁のほか、信長の進攻に備えて築かれたと言われる約140条の畝状堅堀(うねじょうたてぼり)が要所に築かれ、防御に優れた堅固な城であったとされる。天正元年(1573)朝倉氏滅亡により、当城での戦闘無くして廃城となった。

伝 城山に眠る黄金!?

一乗城山には、「黄金千ばい、朱が千ばい」が「朝日もささず、夕日もささず、白いヤドメの下にある」という言い伝えがある。その昔、それを聞きつけた黄金探しの人たちが掘ったという穴が今も残っているそうだ。

また、山頂近くの千畳敷(せんじょうじき)の下には、「不動清水(ふどうしょうず)」として地元に親しまれている湧き水がある。その横には不動尊の石仏が安置されているが、いつも草ぼうぼう。しかし草を刈ったりすると大雨になると言われているので、一雨欲しい時には、お百姓さんたちは城山に登り、掃除をするそうだ。



山城中腹にある「不動清水」

伝 唐門の謎

江戸時代に入り、越前朝倉氏最後の当主・義景の館跡には、朝倉家の菩提を弔うため、義景の法名をとって名付けられた松雲院が建立された。当時の山門・唐門が今も残っているが、山門の表には朝倉家の家紋「三つ木瓜」、裏には義景の裏紋と言われる「五三の桐」が彫られている。このため、地元の人々の間では、桐を家紋とする豊臣秀吉が建立した門と伝えられている。



一乗谷朝倉氏遺跡 朝倉義景館跡の唐門

日本全体各地で領地を奪い合い、戦いを繰り返していた戦国時代。軍資金が不足しないよう、この頃、領地経営以外にも武田氏の黒川金山、毛利氏の石見銀山、上杉氏の佐渡金山といった鉱山支配、織田氏の堺、島津氏の南蛮貿易といった商業地支配など、各国において独自の経済対策を行っていたという。

朝倉氏も一乗谷の近辺の金山を支配していたと言われ、一乗谷朝倉氏遺跡からは、金を板状に延ばした蛭藻金(ひるもきん)や金の製品、金を溶解する坩堝(るつぼ)などの道具が出土している。ガラス工房の跡やガラス溶融ガラス片、ガラス玉なども発見されており、当時としては最先端の技術を持ち、経済的にも豊かな国だったのだろうと言われている。朝倉氏は永正3年(1506)、朝廷絵師の土佐光信に京を描かせて都



遺跡出土の金製目貫

遺跡出土品として日本最古のヴェネチアンガラスの破片からできた復元品・ゴブレット

(福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館蔵)

の景観を手本とし、一乗谷に自らが理想とする都市を建設しようとしていた。朝倉氏がこの「洛中洛外図」を求めたのは、京の文化都市を手本に一乗谷に都市建設を行うとともに、文化による統治を目指していたのではないかとされている。一乗谷には、京の戦乱から逃れてきた、大勢の公家や文化人がいた。こうした者たちから優れた学術、芸術を吸収し、すでに廃れていた武家文化を一乗谷で復興することが、理想の都を築くことにつながると考えていたのではないだろうか。朝倉氏代々の功績を受け継ぎ、5代義景の



「紙本着色洛中洛外図屏風」(歴博甲本)(国立歴史民俗博物館蔵) 中央が細川官領邸。一乗谷の朝倉義景の館は、この館にならって築造したと言われている。

頃の一乗谷は、近隣諸国に比べ安定して一大文化圏となっていたようである。「義景の殿は聖人君子の道を行い、国もよく治まっている。羨ましい限りである」と讃えられていたという。

越前朝倉氏が築いた理想郷 一乗谷



応仁の乱の様子を描いた「真如堂縁起絵巻」(真正極楽寺蔵)

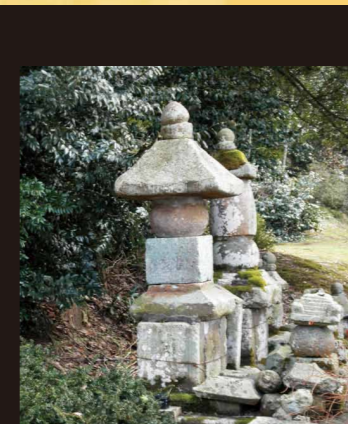
応仁の乱で台頭した 朝倉孝景

550年前に勃発し、戦国時代への転換点となった大乱・応仁の乱。越前朝倉氏103年の礎を築いた朝倉孝景はこの大乱で最も恐れられ、これを機に戦国大名として名をあげた。

朝倉孝景は、正長元年(1428)、越前守護(国単位で設置された軍事指揮官、行政官)であった斯波(しば)氏の家臣である朝倉家景の子として生まれた。幼い頃から才知に優れ、ある時、都大路を進んでいた室町幕府6代將軍足利義教が、道端にいた幼少の孝景を一目見て、まさに英傑の相と感嘆したと伝わっている。応仁元年(1467)、守護の細川勝元と山名宗全の二大勢力が衝突。これに斯波氏の内紛や將軍家の跡目争いなどが複雑にからみ、大乱に発展した。世に言う応仁の乱である。細川方は東軍、山名方は西軍と呼ばれ、孝景は斯波義廉(よしかど)の家臣として西軍に属した。孝景は京都

での御霊合戦や相国寺の戦いなどに参戦し、目覚ましい活躍を見せる。東軍の副将・武田信賢(のぶかた・若狭国守護)の軍勢を襲撃した際には、討ち取った24の首の前で宴会を開き、「この24の首は、山名宗全に見せるため置いたものだ」と語ったと言われ、その豪胆さが伝えられている。同年6月、足利義政が西軍の追討令を出した際には、義廉が降伏する条件として孝景の首を要求するほど、孝景は東軍にとつて恐るべき存在だった。こうしたなか、孝景に対して、幕府の伊勢貞親(さだちか)らによる東軍への勧誘工作がなされた。文明3年(1471)5月、孝景へ、越前国守護職のことは、孝景の希望どおりにする」と記載された御内書と、御判(守護職補任)が発給されるよう取り計らう」という細川勝元の書状が届く。この御内書の発給により、孝景は寝返りを決断。翌月、孝景の嫡子朝倉氏景の東軍への寝返りが明らかにな

り、その寝返りに呼応して孝景は越前国へ出陣した。下克上の先駆者とも言われる朝倉孝景。越前国の掌握を進め、一乗谷に城を構えるなど、国主としての施策の積み重ねがその礎を築いていった。その心構えは「朝倉孝景条々」(領国支配の基本としたもの)として今に伝わっている。



大黒丸城跡(福井市三宅町)

南北朝の動乱期、但馬国(兵庫県)から斯波高経に從い越前に入国した朝倉広景が南朝方の新田義貞との戦いで功を挙げ、この地を与えられ築城したと言われている。城跡からは五輪塔が何基か発見されており、一乗谷へ拠点を移すまでの約130年間、朝倉氏の居城であったと伝えられている。

城 No.1 大黒丸城 (福井市三宅町)

おおくろまる

朝倉家の盛威を高めた 軍奉行朝倉宗滴

文明9年(1477)、越前朝倉初代孝景の末子に生まれた朝倉宗滴。3代貞景から5代義景まで3代にわたり、越前朝倉氏の軍奉行として朝倉軍を率い、各地を転戦し数々の武功を立て、朝倉家の隆盛を支えた。

文亀3年(1503)、主家に対し下剋上を企んでいた敦賀郡司・朝倉景豊は、縁者にあたる宗滴に謀叛に加わるよう誘うが、これに対し宗滴

は「例え多くの怨念があっても当主を裏切るべきではない」と考え、3代貞景に通報したという。宗滴は、その恩賞として敦賀郡司に任命され、敦賀の金ヶ崎城を拠点としてこの地を治めるとともに、一族の重鎮となって朝倉氏を支える存在になっていった。

永正3年(1506)の加賀一向一揆との九頭竜川での激戦をはじめ、

永正14年(1517)、若狭国主武田氏の援軍としての若狭・丹後国の反乱鎮圧、大永7年(1527)足利将軍の要請により上洛し三好勢らと戦った川勝寺口の戦いなど、総大将・宗滴の活躍によって、朝倉家の中央での地位は盤石なものとなっていった。

最後の戦いとなったのが、天文24年(1555)7月に越後国の長尾景虎(後の上杉謙信)に呼応して出陣した加賀一向一揆との戦い。陣中で病に倒れ、一族の景隆に任せて一乗谷に帰還したものの、その年の9月8日に一乗谷にて亡くなった。

宗滴亡き後、加賀一向一揆は、越前に侵入し各地を焼き払う。朝倉家



「鷲鷹図屏風」(左隻/円立寺蔵)
戦国武将の間で「鷹」は贈答品としても大変好まれた。宗滴は鷹に関する調教、飼育技術を研究し、当時では唯一、鷹の人工飼育に成功した人物とも言われている

城 No.3 金ヶ崎城 (敦賀市金ヶ崎町)

文明4年(1472)、敦賀郡を支配した朝倉景冬から、宗滴をはじめとする歴代敦賀郡司の敦賀統治の拠点になった城。元亀元年(1570)4月、信長が越前侵攻のため敦賀に進駐し、妙顕寺(敦賀市)を本陣として、金ヶ崎城とその峰続きの天筒山城の朝倉軍に猛攻撃を開始。背後の防備が手薄なところを狙われ朝倉軍は敗退。金ヶ崎城と天筒山城は、信長に明け渡すこととなった。しかし、信長はまもなく浅井軍の動きを知り、撤退することとなる。



信長・秀吉・家康との激戦の舞台となった

伝 宗滴大勝利!!

永正3年(1506)7月、加賀一向一揆勢総数30万に対して、朝倉宗滴を総大将としたわずか1万騎ほどの軍が応戦。九頭竜川を挟んで対峙した後、宗滴は、「敵の大軍に味方の小勢、待つよりも打って出るべし」と、8月5日の夜、総大将自ら約3千の兵とともに川を渡り、敵陣に奇襲を仕掛けた。不意をつかれた一揆勢はたちまち総崩れとなり退却、朝倉軍の大勝利となった。



九頭竜川のほとりに残る石碑(福井市中角町)

は、幕府の仲介により一揆衆と和睦したが、朝倉氏一族や家臣の内紛、一向一揆衆や周辺諸国の攻撃などもあり衰退を辿ることとなった。

宗滴の言葉を残した『朝倉宗滴話記』には、「天下を取り、御屋形様(朝倉義景)を上京させるための策謀略をさまざまに思案する間に夜を明かした」と記されている。義景を奉じて天下に君臨しようという信念があったからこそ、79年間の生涯を閉じるその時まで朝倉家を盛り立てることができたのだろう。

豊かな文化を育んだものづくりの城

戦国時代、越前に高度な技術を持つさまざまな職人が存在したことは、一乗谷朝倉氏遺跡出土の工房跡や豊富な道具、製品類などから知られている。一乗谷では朝倉氏のお抱え職人として、金やガラス製品を製造する当時の先端技術を持つ職人が存在したという。

日常生活用具から石仏・石塔づくりの石工、馬借(越前海岸沿い、南条郡河野・今泉両浦)、若狭の浦の廻船人、敦賀郡(敦賀市)の川舟座など、多種多様な職人が求めに応じて存在した。

そもそも職人は古代から存在し、奈良時代から役所の工房や大寺院に從属してものづくりを行っていた。この頃は、技術とともに大陸から流入した人たちが多く、農業を営みながら小さな需要にんでいた。平安時代後期になると、各地の国府およびその近辺で定期的に市が開かれ、商業が発展。新たな需要に応じて職人が諸国を巡り各地で製品を作り、市で売買するようになった。

室町時代後期に制作された『七十一番職人歌合』には142種類の職人が紹介されているように、さまざまな職人が各地の需要拡大に応じて定着していた。織田庄(越前町)などの紺屋(紺掻き)、酒や味噌作りを支える麴座(各地)、綿や絹などの機織(越前を中心に各地)、越前焼の陶工(丹生郡平等村(越前町)、檜物師(木製品加工)、漆器づくりを行う木地師・轆轤師・塗師、永平寺門前の門前大工、紙漉き職人と紙座(今立郡大滝神郷(越前市)など)、鎌・鉄・釘の鍛冶師(大野郡鍛冶中(大野市)、鋳物師、刀工や研師、暖房器具や調度品、調理加工に用いる日

やがて職人たちが重用され、「神人(じん)にん・神社に從属する商人)」「寄人(よりうど・荘園に從属する手工業者、職能者)」などと呼び、貴族や寺社の庇護を受けた。対して朝廷側では「供御人(くごにん・朝廷に從属する商人、手工業者、職能者)」と



紙漉き職人

鍛冶や研師

紺屋 (紺掻き)

『職人尽歌合(七十一番職人歌合)』(模本)部分
作/狩野晴川(模)、狩野勝川(模)
東京国立博物館蔵
©Image:TMN Image Archives



一乗谷朝倉氏遺跡 復原町並

呼び、特権を与えて流出を食い止めるようとしたが、鎌倉時代後期には各地に「座」という自治組織を結成し始め、独立するようになった。

中世後期には、戦国大名朝倉氏、若狭武田氏など各国の支配者や有力寺社と結び付き、専売特許を得る者もいるなど、国主による自国産業の保護政策等に乘じて国内産業が発展、座商人が広く活躍した。

伝 職人たちの痕跡

一乗谷のほか、各地にもさまざまな職人が存在した。いくつかの村名や字名に、その由来が偲ばれるところがある。現在の福井県南越前町鑄物師(ものし)には、500年以上前、この地の不動山に金山があり、鑄物師が多数移住してきて大いに繁盛したことから村名にしたと伝わる。また、美浜町新庄にも木地師・轆轤師(ろくろし)などが信長や秀吉から免状をもらい、この地の山中奥に居住したと伝わる場所がある。在地の村人たちにとって轆轤という道具は珍しく、「お軸様」と呼んで大切に扱っていたと言い、今もロクコロという地名が残っている。通称「軸屋」という屋号を持つ家もあるそうだ。

朝倉家臣団の行方

元福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館副館長 佐藤圭氏

戦国大名の家臣団は、当主の一族・一門、重臣、譜代、外様などに分類され、朝倉氏の場合それぞれ同名衆、年寄衆、内衆、国衆などといった。

天正元年(1573)8月、朝倉義景が敗北して滅びても、一族・重臣のかんりの部分が織田信長方に降参したと思われる。しかし、その後越前一揆により各個撃破され、越前国は本願寺の支配下となるが、再び信長により武力制圧され、織田政権の北陸進攻の拠点とされた。こうしたなかで信長とその部下に従属した朝倉氏旧臣も多かったであろう。

一方、越前を脱出して朝倉氏再興を計った同名衆もあり、朝倉修理亮景嘉は越後国(新潟県)の上杉謙信を頼って下向し、朝倉宮増丸は備後国鞆(とも)(広島県福山市)に滞在する将軍足利義昭のもとに書状を

送って毛利氏の助力による朝倉氏再興を要請した。しかし、こうした同名衆による朝倉氏再興策はことごとく失敗し、同名衆の末席に連なる溝江氏だけが越前の豊臣大名として存続した。

朝倉時代末期の年寄衆は、前波・魚住・桜井・青木・梅野・詫美・山崎の七家あった。

前波氏は一乗谷の北に隣接する前波の地を名字とする譜代筆頭の重臣で、義景滅亡後に前波長俊は越前の守護代となった。一揆により一家が殺された後、同族の前波了実坊盛舜という人物が信長の誘いを受けているが、その後どうなったかはわからない。前波半入は秀吉の御咄衆(おとぎしゅう、側近)となり、その家は江戸幕府の幕臣になった。魚住氏はもと播磨国(兵庫県)出

身で初代孝景に属した。前波長俊を滅ぼした富田長繁に謀殺されて滅びたとされる。

梅野氏は一乗谷の北西約6キロメートルに位置する梅野の地を名字とする地侍で、朝倉氏滅亡後に前田利長の臣となる梅大学は梅野氏の可能性がある。後に同家は出羽国庄内藩(山形県鶴岡市)酒井家の臣となり、出羽松山藩(山形県酒田市)の家老になった。

詫美氏は室町期の斯波氏被官詫美氏と関係するとみられ、尾張の詫美(愛知県一宮市)を名字の地とする。滅亡後の動向は未詳。

山崎氏は、村上源氏で赤松氏の末裔、山城国山崎(京都府乙訓郡)に居して名字としたという。朝倉氏が織田信長勢によつて大敗した刀根山合戦(1572)で討死した山崎吉延の嫡子長徳は、その後、明智光秀、

保田安政(柴田勝家の甥)の臣となり、賤ヶ岳合戦(1583)後、加賀松任城主前田利長に召し出されて、以後軍功を上げ、後に加賀藩(石川県)の家老となり、最後は大坂の陣(1614~1615)まで活躍した。この山崎氏は加賀藩やその支藩の大聖寺藩(石川県加賀市)の重臣として続いた。

以上のように朝倉義景滅亡後、江戸時代に至って旧朝倉氏重臣は越前に居残ることができず、新天地を求めて転出した。

しかし、越前の在地には朝倉時代の家臣文書を伝えた家が若干だが存在する。

足羽郡北山村(福井市東部)で福井藩の組頭(大庄屋)を勤めた諏訪家は朝倉氏の内衆諏訪神氏の文書を伝えていた。

朝倉氏の同族三崎氏を祖とする三崎玉雲家は、朝倉氏の内衆笠松氏の文書6点を伝えた。笠松氏の名字の地は一乗谷の東北約10キロメートルに位置する永平寺の東の山「傘松」とみられる。初代孝景・貞景・4代孝景の書状や判物があり(福井県立歴史博物館蔵)、福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館蔵の『鳥居文書』と並ぶ、現存する朝倉氏家臣文書の稀有の例である。笠松氏の文書がなぜ三崎家に伝わったのか知られないが、三崎家はもと一乗谷にあった安養寺の筆頭の檀家で、江戸時代も医業を業として福井に居した。両者の接点がこの地にあったのであろう。

また、同じく大庄屋を勤めた福井市合谷町の片岡五郎兵衛家には新開氏の文書が伝わっており、朝倉義景・柴田勝家・堀秀治らの感状や判物などが6点残っている。新開は一乗谷の西方7キロメートルの地名で、ここを名字とする地侍が織豊期も越前にいたことがわかる。片岡家はその末裔と伝えられ、朝倉氏家臣の家が江戸時代も在地で存続していたことが知られる。

その他、越前国居倉浦(福井市越廻)の刀祢(とね・河川や港浦を仕切

る者)を務めた山本氏の文書が残っており、朝倉氏景や貞景の書状の原本がある。この場合も明らかに江戸時代も越前に存続したといえる。

最後に江戸時代福井藩松平氏に起用された朝倉氏旧臣もある。一例を挙げると藩祖結城秀康に召し出された岸家は、もと朝倉氏の臣で鷹匠を務めて数代幕目村(福井市引目町)に住し、朝倉氏の判物や信長朱印状、柴田勝家・丹羽長秀・同長重・長谷川秀一等の歴代の判物を持っていたという。

以上のように、朝倉氏の家臣団のかんりの部分は、やはり越前の在地に居残ったようである。しかしめぐるしく代わる織豊期の領主のもとで武士としての立場を維持しえたものは少なかった。また福井藩も給人を現地採用する例は少なく、越前の朝倉氏旧臣たちは大庄屋などを務める有力農民へと転化していった。

なお、江戸時代、加賀(石川県南部)・能登(石川県北部)・越中(富山県)三か国を領した加賀藩前田家では、家臣団の中核として朝倉氏の旧臣が採用された。

前田利家・利長は、天正3年(1575)の越前府中城3万3千石

から、関ヶ原の戦い後の慶長5年(1600)には三か国で120万石の大大名となり、25年間で領知を飛躍的に拡大。その必要から、実務経験に豊富な朝倉氏遺臣が求められたのだろう。しかしながら千石以上の知行取は、藩主との縁戚関係や山崎長門(閑斎)1万5千石など特別の軍功があった者に限ら



「前田利家画像」(部分)(開禅寺蔵)

家臣団の主な分類

当主の一族・一門、重臣、譜代(数代に亘って主家に仕える)、外様(前者に比べて疎遠にある家臣)

朝倉家臣団の主な分類

- ◆同名衆…同じ名字を持ち、行動をともにした一族
- ◆年寄衆…政務の中心に位置する者
- ◆内衆…直属の家臣
- ◆国衆…土豪

れ、多くは100石から300石程度の小祿であった。

前田家は江戸時代改易されることもなく続き、召し抱えられた朝倉氏旧臣たちの子孫とともに存続することとなった。

伝 越前浜という地名の由来

伝承によれば、戦国時代に朝倉氏一族が戦乱を避け越前国から船で逃げていたところ、荒天で難破したが、岸から鶏の鳴き声を頼りに現在の新潟県新潟市角田岬に漂着した。これが越前浜の由来と伝えられている。このことから、この地を拓いた先人たちにとって、鶏は命の守り神としての存在となった。やがて鶏を祭神とした「鳥之子神社」を建て崇敬する。この地の人々は1945年の戦後まで鶏肉・鶏卵を食絶ちしたという。

また、この集落には、越前国の西光寺の6代目住職・性善によって慶長8年(1603)開基された西遊寺があり、越前朝倉氏とのゆかりを今に伝えている。伝承では、天正元年(1573)に灰塵に帰した一乗谷から逃れたが、途中で殺害されたとされる愛王丸(朝倉義景の子)が生き延びて、この西遊寺の初代住職・永尊師になったとされ、開拓した先人の苦労とともに語り継がれている。

日本一の太刀使いとして勇名を馳せた真柄十郎左衛門(直隆)。織田・徳川連合軍と浅井・朝倉連合軍との戦い・姉川合戦では、ひときわ長い刀で戦ったという十郎左衛門は、天文5年(1536)に生まれ、朝倉義景の客将となり、越前味真野真柄(越前市)に居館を構えた。

永禄8年(1565)、室町幕府の政変により、時の将軍・足利義輝が殺害。義輝の弟、足利義昭は将軍位の回復のため越前国主・朝倉義景を頼り、永禄10年(1567)に一乗谷に移った。翌年開かれた観桜の宴にて、義昭の家来が、越前の真柄は無双の大力で、太刀使いとしてその名は天下に鳴り響いていると述べ、十郎左衛門が呼ばれた。十郎左衛門は二本の太刀を受け取ると、軽々と頭上で数十回振り回し豪傑ぶりを披露。皆は「夜叉神も及ばない」と感嘆したという。

しかし、その後、足利義昭は織田信長とともに上洛。室町幕府最後の15代将軍となった。朝倉義景は織田信長の再三の上洛要請を拒否。近江の浅井長政は同盟関係にあった信長を裏切り、元亀元年(1570)6月、

天下一の大太刀使い 真柄十郎左衛門

織田・徳川連合軍と浅井・朝倉連合軍が激突した姉川の合戦に至った。この戦には、古今を通じて最も大きな太刀を実戦で使った十郎左衛門のエピソードが残っている。

徳川軍は別動隊で朝倉軍の側面を攻撃。大将・朝倉景健が危うい状態となった際、怪力の十郎左衛門は、大太刀を四方八方に振り回した。周りの四、五十間四方には、田んぼを耕したように屍が転がったという。その後、徳川四天王の一人である本

多忠勝がこの進撃を止めに入り、入れ代わって句坂式部(さきさかしきぶ)ら4人が攻撃。十郎左衛門は、唯四人で我に向かうは殊勝なりと応戦。4人との奮戦の末、

鎌槍でかけ倒され、最後はあっぱれなり、いざ鬼真柄の首をとって武士の誉れにせよと、敵に自らの首を献上して果てたという。



築城年代は定かでないが、真柄氏によって築かれ、「真柄」の地名が今も残る。真柄氏はこの地を中心に勢力を持ち、館跡と伝わるどころがいくつかある。ここは真柄十郎左衛門直隆の出生地と言われており、また直隆の五輪墓が近くの興徳寺(越前市宮谷町)に残っている。



伝 越前打刃物の祖

真柄十郎左衛門の「太郎太刀」を製作したとされる、越前の刀匠・千代鶴国安を祀る千代鶴神社(越前市京町2丁目)。千代鶴は、越前鎌の製作技術を発明し、地域の鍛冶屋に伝授したことから、「越前打刃物(国の伝統的工芸品の指定)」の祖とされている。



「姉川合戦図屏風(一部)」(福井県立歴史博物館蔵) 句坂式部に対し、大太刀を振りかざす朝倉家臣・真柄十郎左衛門

「太刀 銘 行光」(白山比咩神社蔵) 真柄十郎左衛門が使用したと伝わる「太郎太刀」のひとつ

朝倉氏を支えた名族 溝江氏と堀江氏

朝倉家の有力家臣 溝江氏

溝江氏は、越前北部「溝江郷」(坂井市北東部)の豪族で、後に朝倉家有力家臣となり、加賀(石川県)との国境の防衛拠点・金津城の主となった。

朝倉氏の一方向一揆討伐軍に参戦し、しばしば武功を立てたが、天正元年(1573)に朝倉氏が滅び、越前国内の一揆残党が蜂起。加賀国からも加わり、越前は一揆の勢力下となった。天正2年(1574)2月、里方からはやかんや小鍋を兜とした者、山方からは鹿や熊の皮を鎧とした者たちが、竹槍や包丁を持って各寺院から集合。総勢2万余の一方向一揆勢が溝江氏の居館に打ち入った。溝江景逸(かげやす)・長逸(ながやす)父子はやむを得ず館に火をかけ、ともに自害して果てた。

しかし、溝江長逸の嫡子・長澄は、一人逃れて生き延びたと伝えられている。長逸は長澄に、主君義景

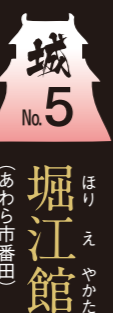


溝江氏の館が、天正2年(1574)の一方向一揆によって落城する様を後に描いた「金津城溝江館落城之図」(あわら市郷土歴史資料館蔵)

公から拝領した鎧を付けさせ、闇夜ひそかに脱出させたという。後年、父の「大炊助」を名乗って美濃国の織田信長を頼り、信長亡き後は長浜城主・羽柴秀吉(後の豊臣秀吉)に仕えた。後に金津城主として溝江家を再興した。

越前生え抜きの名族 堀江氏

長禄3年(1459)8月、越前北部の「坪江郷」(坂井市北東部)あわら市を中心に、この地の支配をめぐる守護・斯波氏と守護代・甲斐氏が対立。堀江氏は斯波氏の命で甲斐氏と争うが敗北し、一旦衰亡した。一族は加賀(石川県)に亡命



堀江館

朝倉孝景の重臣として活躍した堀江景経の妻は、雲上の落胤で世間では龍女と称した。ある日、「懐妊したので、新しい産所を建てて欲しい」と言うので、景経は妻のため、望み通りの産所を建てた。妻は、「男子が生まれたら、家伝の『霞の旗』を母の記念に見せてほしい。この『霞の旗』をさして戦えばどんな強敵に向かっても勝利できる」と言い、大蛇の目8つ付いた旗を景経に渡し、さて、いよいよ妻が産所に入ることになった。妻は、産所には人を遠ざけ、人の音も近づけてはならぬと言い、産所に籠もってしまった。景経は、あまりに待ちかねて、密かに中を見てしまった。すると中には、目は日月、鱗は星のように輝く大蛇があり、鉄の角を振りたて、赤い舌を出し赤子の鱗をなめ落としていた。大蛇は、大いに怒り、産所を打ち破って消えていった。あとには玉のような男の子があり、脇下には3枚の鱗があった。この子は成長して堀江景用と名乗った。これより堀江家を継ぐ者には必ず鱗が3つあったという。この伝説とともに、堀江氏の菩提寺である龍雲寺に残る地蔵の下には、龍女の櫛・簪(こうがい)が埋められているという伝説がある。

したが越前に進出し、朝倉氏に臣従して越前平定に協力。国衆(朝倉氏の支配機構に直接関与せず軍役の一部を負担する者)として、一方向一揆攻めで数々の功績を上げ、再び越前での勢力を回復していった。

しかし、ある時「堀江家の当主・堀江景忠は、越前国主・朝倉義景に反旗を翻し『加賀一揆軍』と語って謀叛を起こす」という風説が流れた。永禄10年(1567)、朝倉義景は堀江氏を攻撃。事実無根の噂のため

伝 鱗を持つ龍女の子

朝倉孝景の重臣として活躍した堀江景経の妻は、雲上の落胤で世間では龍女と称した。ある日、「懐妊したので、新しい産所を建てて欲しい」と言うので、景経は妻のため、望み通りの産所を建てた。妻は、「男子が生まれたら、家伝の『霞の旗』を母の記念に見せてほしい。この『霞の旗』をさして戦えばどんな強敵に向かっても勝利できる」と言い、大蛇の目8つ付いた旗を景経に渡し、さて、いよいよ妻が産所に入ることになった。妻は、産所には人を遠ざけ、人の音も近づけてはならぬと言い、産所に籠もってしまった。景経は、あまりに待ちかねて、密かに中を見てしまった。すると中には、目は日月、鱗は星のように輝く大蛇があり、鉄の角を振りたて、赤い舌を出し赤子の鱗をなめ落としていた。大蛇は、大いに怒り、産所を打ち破って消えていった。あとには玉のような男の子があり、脇下には3枚の鱗があった。この子は成長して堀江景用と名乗った。これより堀江家を継ぐ者には必ず鱗が3つあったという。この伝説とともに、堀江氏の菩提寺である龍雲寺に残る地蔵の下には、龍女の櫛・簪(こうがい)が埋められているという伝説がある。

戦国時代の女性

一乗谷・朝倉氏を中心に

元福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館副館長 佐藤圭氏

一乗谷に所在する石塔などの銘文には、当時の女性の記載が見られる。

大姉、禪尼(禪定尼)、比丘尼など法名(戒名)にそえられる称号は、それぞれ在家の信者、剃髪して家にいる女性、出家して具足戒を受けた尼僧などを示しているが、74件、103件、23件ほどある。これらの銘文は大部分が同時代の追善供養のための墓石銘であり、在家で亡くなった女性が多かったこと、本格的な尼僧は少なかったことなどがわかる。子供は童子・童女などとよばれ、50件と61件ある。これらの銘文に記された女性や子供が一乗谷で生活し、亡くなったことは想像に難くない。

一乗谷出土遺物では、櫛・簪(かんざし)・紅皿・お歯黒壺・渡し金などの

化粧道具や下駄があり、女性にも愛用された。室町時代の職人の様子を

図示した『七十一番職人歌合』によれば、扇売・帯売・魚売・米売・豆売・豆腐売・素麺売・麴売・白布売・綿売・薫物売・心太売・餅売など多くの小売業に女性が見られる。紺掻(こうかき)・機織(はたおり)・縫物師・組師など織維関係の業種にも女性が活躍している。一乗谷の町屋でもこうした女性の職人や商人たちが生き生きと暮らしたのであろう。また立君(たちぎみ)・図子君(ずしぎみ)・白拍子などの遊女も職人とされるが、一乗谷ではその周縁部の東大味や高尾に遊女町があったという。

戦国時代の女性は、政略結婚や家柄の保持など大名や家臣にとって

重要な政治的役割を担った。朝倉氏

当主の場合をみると、2代氏景より、国外の有力大名家から妻を迎えているが、3代貞景からがよく知られる。その室祥山禎公は美濃守護代家斎藤氏の娘で、美濃は守護土岐氏・守護代斎藤氏が続く。貞景との結婚は延徳3年(1491)4月で、美濃から一乗谷に盛大な「輿入れ」がなされた。斎藤氏の騎馬武者5騎、走衆30人に警護され、輿は全部で10丁、中間(ちゅうげん)・小者(こもの)の数知れず、彼らの太刀はみな金で飾られていた。持参した嫁入り道具を納めた長持・唐櫃(からびつ)は数十台、輿には本人のほか上級の女房衆が乗っていたと思われる。新妻は当時16歳で、2年後に長男の孝景(4代当主)と、そして二男の景高らを産んでいる。その後長期にわたって朝倉氏と美濃の斎藤氏・土岐氏との親密な関係が続く、朝倉氏は周辺諸国に対して強い影響力を發揮した。

4代孝景の妻は若狭武田氏光徳院である。天文2年(1533)長男義景を産んでいる。この間22年にわたって朝倉氏の後継者たるべき嗣子がいなかったのは大名家として最大の危機であったが、敦賀郡司教景

(宗滴)・大野郡司景高ら一族兄弟の

協力により朝倉氏権力は安定した(のちに景高は謀叛を起こす)。光徳院の父親は武田氏庶家の信孝とみられるが、その妻西殿(光徳院の母親)と共に一乗谷に滞在して孝景・義景父子を支えた。光徳院は京都の公家・武家と強い結びつきを持ち、晩年出家して「二位ノ尼」と呼ばれた。

5代義景は、最初管領細川晴元の娘と結婚し、死別して前関白近衛種家の娘を妻に迎えたが子ができず離縁し、越前斯波氏の鞍谷氏の娘「小宰相ノ局」を寵愛し、長男阿君(くまぎみ)をもうけた。しかし阿君は足利義昭の一乗谷滞在中に毒殺されてしまう。その後、美濃斎藤氏の小少将を妻として諏訪館に入れ、嗣子の愛王丸が生まれた。義景自

尽後、愛王丸・光徳院・小少将は裏切った景鏡によって捕えられ、愛王丸と光徳院は織田信長の陣所に送られた。信長は丹羽長秀に命じて今庄の埴の里(かえるのさと)の堂で兩人を刺し殺し、堂もろとも焼き捨てた。小少将の行方は定かでないが、懐妊している義景の妾が美濃の願興寺の別当を頼って隠れ住み、二子を産み、持参した黄金で願興寺に梵鐘を

施入したという伝説もある。

一乗谷の朝倉義景館を発掘した時、多くの建物遺構が検出されたが、婦人や女房たちの居住区は館内に見当たらなかった。しかし館の排水の暗渠出口直下の濠から「少将」あるいは「少しやう」と墨書された小さな付札8枚が出土した。これは女房名の表記と見られ、館内で生活した女性の持物に付けられたものと考えられる。軍記物に「小少将」・「少将」・「小将」などと表記される義景最後の妻に当たるのだろうか。

一乗谷の滅亡にともない、義景をはじめとする多くの一族・家臣らは大

野に逃げ延びたが、老武者築山清左衛門入道は城を捨てて遁れるのを

潔しとせず、再び恥辱を受けるよりは身を以て国に殉ぜんと踏み留まって、妻子を刺し殺して川に突き落とし、自らも切腹して、谷川の水に身を投げて死んだ。後人はそこを「見(ち)が淵」と呼んだという。また、敵兵に捕えられて辱めを受けるよりは死を選んで井戸に身を投げて死んだ、年の頃17、8、姿形美麗の「乗節婦」の物語と辞世の歌「よになは よしなきくも ををひなむ いざいれてまし やまのはのつき」も伝えられている。



朝倉義景館濠出土木簡「少将」
(福井県立一乗谷朝倉史跡資料館蔵)



遺跡出土の化粧道具
(福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館蔵)



朝倉義景が妻の小少将のために造園したと伝わる、特別名勝庭園朝倉氏庭園の一つ「諏訪館庭園」(写真提供/水野克比古)

天下に猛威を振るい 勢力を増大した

信長

織田信長の祖先が神官を務めていたことでも知られる劔神社(越前町織田)。応永年間(1394~1428)、越前守護・斯波氏が劔神社を参拝した際、その才能を見出されて家臣として取り立てられ、尾張の国に派遣された。名字は故郷の地名を取って織田を名乗り、次第に尾張で勢力を伸ばし、信長の時代には尾張国一円を掌握。さらに日本全国へと勢力を拡大。信長は、戦乱の世にあっても劔神社を深く崇敬し、武運興隆を祈るとともに多くの神領を寄進するなど、劔神社の保護に尽くした。信長は、天下統一を前に本能寺の変で最期を遂げたが、越前・織田庄の人々は信長の功績と威徳を偲び、御霊を境内の小松建勲神社に合祀した。



織田信長の御霊が眠る小松建勲神社(越前町織田・劔神社境内)



天正元年(1573)の織田信長軍と朝倉義景軍の戦いの動き

「織田信長画像」(長興寺(愛知県豊田市)蔵) 家臣の与語久三郎正勝が狩野元秀に描かせ、天正11年(1583)6月2日の信長の一周忌に寄進。没後間もなくの肖像とされる



劔神社(越前町織田)

永禄11年(1568)、室町幕府最後の将軍となった足利義昭が信長に守られて上洛を果たした。翌年、信長は越前朝倉氏5代義景に対して「上洛して従え」との書状を出したが、義景はこれを無視。元亀元年(1570)4月20日、信長は義景を討つべく、京都から直ちに越前へと

出発。大軍を率いて越前に侵攻したという。朝倉義景は、金ヶ崎・天筒山城(敦賀市)を改修し、木ノ芽峠や近江の中河内、椿坂などの国境の要衝に城を築き、これに備えた。また本願寺や延暦寺との連合を進め、信長方に対抗した。信長軍は同年4月22日には若狭・熊川へ、23日には美浜・佐柿へと進軍し、25日には天筒山城を猛攻撃。いよいよ木ノ芽峠から一乗谷へと侵攻しようとしたその時、浅井長政の謀叛の知らせにより、急遽退却。金ヶ崎城には秀吉を残し、近江へと続く朽木峠越えを決行。京都に逃げ帰った。しかし、義景と信長は、以後4年にわたって対立を続け、戦闘が繰り返された。

浅井長政、本願寺顕如との反信長戦線を形成し、朝倉氏と連携する近江の浅井長政には、本願寺から近江の門徒勢が協力する態勢をとった。さらには、室町幕府15代將軍足利義昭が、信玄の上洛の動きに応じ、反信長戦線に加わって挙兵計画を立てた。信玄と徳川家康との三方が原の戦いでは信玄が勝利し、反信長陣営の逆転のチャンスは何度かあったのだが、元亀4年(1573)、信玄が陣中に病死すると勢力は急転した。室町幕府は名実ともに滅び、信長によって元号が「元亀」から「天正」に改元された。

そのような状況のなか、義景が諸勢を引き連れて一乗谷を出立し近江

へと向かった。信長は、浅井長政の居城である小谷城(北近江、滋賀県)、大獄城(おおづくじょう)などを攻め落とし、義景の軍を攻撃。義景軍は信長の猛攻により、正壇城へ退却せざるを得なくなった。8月13日、義景軍退却途中の「刀根坂の戦い」は凄惨さを極めた。大敗した義景は4、5騎の家来とともにようやく一乗谷に帰城した。この時、義景の従兄・朝倉景鏡(当時の大野郡司)が「山中深く、平泉寺が味方すれば、信長勢は簡単に攻め落とすことはできないでしょう」と大野へ退却することを進言したため、義景は数十名の家来とともに一乗谷を捨て、数多くの僧兵がいる平泉寺を頼りに大野へ

逃れた。身内や外様衆もすべて立ち去り、当主さえも逃亡し、一乗谷は、「酒宴の栄え楽しんだ鼓の聲は松風の音となり、宮殿楼閣はただ邯鄲一炊の夢(かんだんいっすい)はかないこと」と醒めて跡形もない。野のキリギリスが一匹だけ鳴き明かしている「ような有様になったという。義景は、大野で体制を立て直しを図ろうとしたが、頼みの平泉寺にも裏切られ、8月20日、大野の六坊賢松寺にて自刃。41歳、無念の最期であった。5代103年にわたり越前を支配した名門 朝倉家は滅亡した。刀根坂の戦いから、わずか8日のこと

城6 木ノ芽峠城塞群

きのめとうげじょうさいぐん
(南越前町・敦賀市)

木ノ芽峠は、古くから北陸道の難所として知られ、平安から戦国時代にかけて地方と中央を結ぶ街道の要衝として重視された。越前の国境防備の城の中心であった木ノ芽峠城は、永禄12年(1569)に朝倉義景が構えた。朝倉氏滅亡後は織田家臣が守備したが、一向一揆との戦場となった。

城7 正壇城

ひきだ
No.7
(敦賀市正田)



文明年間頃、近江方面からの進攻に備える越前の最南端の守りとして、戦国大名朝倉氏が家臣の正壇対馬守

久保に築かせた。元亀元年(1570)、織田信長が天筒山城を陥落させた時、当城も破壊された。その後朝倉氏は当城を修築し、家臣を置いたが、天正元年(1573)8月の織田軍の越前侵攻の際の攻防戦で落城した。

伝 義景の娘

元亀2年(1571)6月11日、朝倉義景は本願寺と和睦し、義景の娘を本願寺教如(顕如の嫡男)と婚約させ、本願寺との同盟を結んだ。義景の娘は、教如の最初の妻・三位殿(さんみどの)となり、教如との間に一女をもうけたと伝わる。教如が豊臣秀吉から隠退を命じられ、大坂退去の際に離縁され、1614年に亡くなったという説があるが、よく分かっていない。

一方、教如は、秀吉亡き後、徳川家康に意欲的に接近。本願寺から独立し、東本願寺の創始者となった。



「絵本拾遺信長記」(早稲田大学図書館蔵) 江戸時代に庶民の間で読まれた軍記物。義景の娘が本願寺に輿入れするときの様子が描かれている

信長、秀吉も 越前の要とした府中

室町幕府全盛期の3代将軍足利義満の頃、守護大名には、三管領筆頭の家柄である斯波氏、畠山氏、細川氏などが名を連ねていた。特に越前国などを掌握していた斯波氏は、幕府宿老として幕政に大きな発言力を持ち、将軍家足利一門の中でも本家に次ぐ家格を誇る有力者だった。斯波氏は越前府中(国府、越前市)を拠点に越前を治め、その斯波氏に仕えていたのが、朝倉氏、織田氏、甲斐氏などだった。やがて、斯波家ははじめ有力守護大名や将軍家の家督争いが起こり、応仁の乱が勃発。これを機に朝倉氏は、下剋上により越前国を斯波氏から奪い「戦国大名」となった。朝倉氏は、越前統治の拠点を府中から一乗谷に移し、斯波氏が守護所を置いていた府中には、府中奉行人を置いて治めた。

一揆はこの時を待ち構えていたかのように蜂起。織田方の武将を討ち、平泉寺などの敵対勢力を攻撃し、越前国は一時、一揆衆による国となった。これに対し、天正3年(1575)8月に一揆鎮圧、さらには旧寺院勢力打倒のため10万余りの軍勢で進撃した織田信長。府中はその凄惨な戦いの舞台となった。信長軍により越前国の一揆の時代は1年半で終焉。府中奉行所跡には、織田家臣・前田利家(後年、加賀藩主となる)が府中城を築いて拠点とした。

利家は、その地にあった惣社(そうじゃ・特定の地域の神社の祭神を集めて祀った神社)を移転させ、近くの日野川までも外堀として活用した壮大な平城を築き上げる。豊臣政権下で城主は転々としたが、関ヶ原の戦い後は、越前を治めた結城秀康の重臣・本多富正が、この城をさらに修築し代々の居館とした。

今に残る 金森長近の 城下町

朝倉孝景が越前国を掌握するための最後の戦場となったのが大野郡(現在の太田市・勝山市)だった。当時の室町幕府管領・越前国守護斯波家の家督争いも一因となって京の都を荒廃させた応仁の乱において、朝倉孝景は朝倉家の主家・斯波氏が属する西軍(山名宗全派)から東軍(細川勝元派)に寝返り、斯波氏との最終戦を大野で迎えた。文明7年(1475)、孝景は斯波氏の政庁が置かれていた戌山城を攻め落とした。その後、戌山城の

支城・小山城に立て籠もる斯波勢と戦い大勝利を挙げ、孝景は越前国主の座に君臨。小山城は陥落、斯波氏は討ち死にした。

大野郡はその後、越前朝倉氏初代孝景の弟たちが代々治めることになった。その居城となったのが、戌山城と小山城の間に位置する亥山城(別名、土橋城)である。朝倉一族として最後に郡司を務めた景鏡(かげあきら)が、主君・義景(越前朝倉5代)を裏切り、この地で自刃させた功績により、織田信長から一文字貫い信

城 No.8 府中城
ふちゅうじょう
(越前市府中)
府中城の名残りは、城の表門を移築したと伝えられる正覚寺山門(越前市京町2丁目)で見ることができる。建築年代は不明だが、城門にふさわしい堂々とした造りがある。



正覚寺山門(越前市京町)

城 No.10 小丸城
こまる
(越前市五分市町)
天正3年(1575)9月、織田信長は越前国を柴田勝家に預け、目付け役として府中三人衆(前田利家、佐々成政、不破光治)を配した。その一人、佐々成政の居城と伝わる小丸城二の丸から発見された文字瓦。前田利家による一揆制圧ぶりを語ったものとして知られ、千人の一揆衆が礫(はりつけ)にされたたり窯で煎(し)られたりした有様が、この瓦に刻まれている。



小丸城跡出土瓦
(味真野史跡保存会蔵)

城 No.9 大瀧城
おおたき
(越前市大瀧町)
鏡(のぶあきら)と名乗るとともに、居城であった土橋城、あるいはその名の由来となったこの地域の古称「土橋庄」にちなみ、朝倉から土橋(つちはし)へと姓を変えている。



大瀧城跡

一向一揆衆徒により大規模に修築。天正3年(1575)、滝川一益ら信長軍との戦場となり、一揆軍600余りが討ち取られた。

伝 信長家臣・滝川一益の最期

一揆殲滅のため大瀧寺を焼亡させた滝川一益は、その戦勝を神に感謝し、自身の鎧一具を権現山大杉の下に埋めたと伝わる。後に発掘され、現在の大瀧神社に保管されているそうだ。また、近くの谷で、大瀧寺へと進攻する一益は待ち伏せされ、朱鞘の太刀で一益の馬脚を斬られてしまう。この時の太刀も納められているという。一益は大瀧権現の七堂伽藍を焼き滅ぼしたので、たちまち神罰を受け、両眼を失い、その後流浪の身となって再びこの地にやってきたところを村民が怨みをほらすべく打殺された。その亡骸を葬った場所は「不老(おおいず)の狐塚」と呼ばれている。近くの豊泉寺(越前市地泉町)に滝川一益兄弟の墓が残っている。



「金森長近像」(飛騨高山まちの博物館蔵)

おの
城 No.11 大野城
(大野市城町)



現在の大野城(大野市城町)

伝 今も湧き続ける本願清水

亥山城(土橋城)に入った石山本願寺の坊官杉浦吉岐が本願寺門徒を使って池を掘り下げ、その豊富な湧き水を城の周囲の堀水としたことから、「本願寺清水」とも言われている。大野城下を整備した長近は、この湧き水を城下町に張り巡らし、生活用水として活用したという。清澄な水や水環境は今も残っており、平成20年度環境省「平成の名水百選」に選定。陸封型イノシシの生息地の南限として国の天然記念物に指定されている。



「本願清水」(大野市糸魚町)

山城に一旦入城するが、東側の亀山に大野城(後に長近の居城)を築き、そのさらに東側のふもとに城下町を整備した。各地の戦場に赴きながらも、整然と短冊状に整備したという長近の城下町は、現在の太田の市街地にそのままの姿をとどめている。

そして長近は4年の歳月をかけて大野城を築城。外堀と内堀を設け石垣を組み、天守を構えた平山城で、2層3階の小天守に2層2階の小天守、付櫓があったという。安永4年(1775)、城下の大火により本丸を含む城郭のすべてを焼失したが、昭和43年(1968)に現存していた野面積みの石垣を活用し、本丸の天守が再建された。近年は、雲海の中に浮かぶ幻想的な姿を見ることができ、ことから「天空の城」と言われ、全国からお城ファンが訪れている。

信長の安土城にも劣らぬ 柴田勝家の 北庄城



主君・織田信長の安土城と並ぶ豪
壮雄大な城郭、北庄城を築いた柴田
勝家。勝家は、信長の有力家臣とし
て知られ、天正3年(1575)8
月、越前国にて城地を占定すると直
ちに築城にかり、同4年および6
年に再度の修理を行って城郭を拡大
していった。同9年頃にも工事続行
中とみえて、同年4月に布教のため
北庄を訪れた宣教師ルイス・フロイ
スの本国宛の書翰に「此城は甚だ立
派で今大きな工事をして居り」とあ
り、また、城や家々の屋根は石で葺
いてあって美しいと記されている。

勝家の越前国の治政は9年間では
あったものの、越前・近江国境の栃

ノ木峠を開削し、信長の安土城へと
通じる最短ルートとなる街道を整備
するなど、国内のインフラ整備にも
力を注いだ。

天正11年(1583)4月21日、
賤ヶ岳の戦いで羽柴秀吉に敗れた勝
家は、近江国から自らが整備した街
道を敗者として下ることとなった。

途中、賤ヶ岳の戦いで勝家を裏切っ
た府中(越前市)の前田利家を訪ねた
が、背信を責めることなく、これま
での働きに礼を述べたという。同年
4月24日、北庄城に帰った勝家は、
一族を集め、最後の酒宴を催した
後、火を放ち、妻・お市の方(信長
の妹)とともに自害。壮麗な城は灰

燼に帰した。
勝家の死後、秀吉
は、前田利家を先鋒と
して加賀(石川県)に攻め
入り、勝家の勢力下にあった小松城
や尾山城を受け取り、一帯を制圧す
るとともに、佐久間盛政や滝川一益
など反秀吉派の武将に対し極刑もし
くは厳しい処罰を与えた。この時か
ら飛躍的に秀吉の支配権が拡大し、
事実上の信長の後継者となっていっ
たのだった。

勝家時代の北庄城本丸跡は、城址
公園として整備され、石垣の一部が
公開されている。また、勝家を祭神
として祀る柴田神社が隣接する。

名だたる武將に 愛された 絶世の 美女お市



「浅井長政夫人画像」(部分)
(滋賀県立安土城考古博物館蔵)

戦国時代きっての美人として、ま
た、運命に翻弄された悲劇のヒロイ
ンとして知られるお市の方。お市の
方は、天文16年(1547)に織田
信長の妹として、尾張国(愛知県)
に生まれた。お市の方は、信長の命
で、永祿10年(1567)、近江国
(滋賀県)の小谷城主・浅井長政に嫁
ぎ、三人の娘(後の淀殿(茶々)、常
高院(初)、崇源院(江))と二人の息
子をもうけた。

信長の越前攻めに端を発した戦い
で、夫・長政と死別した後、お市の
方と三姉妹は美家の織田家に引き取
られるが、天正10年(1582)6
月2日の本能寺の変で、明智光秀に
兄・織田信長が討たれ、同年6月27

日の清洲会議(尾張の清洲城で信長
の正統な後継者と遺領配分を決めた
会議)において、お市の方と織田家
筆頭家老・柴田勝家との再婚が決定
され、越前国へと移った。しかし、
天正11年(1583)4月21日の賤ヶ
岳の戦いにて、勝家は羽柴(豊臣)
秀吉に攻められ、勝家とともに越前
北庄城で自害。37歳だった。戦乱の
世に翻弄されたお市の方。「さらぬ
だに打ちぬる程も夏の夜の別れを
誘う時鳥かな(時鳥(ほととぎす)は
あの世からの鳥というけれど、そ
うでなくても寝ているはずの夏の夜に、
この世からの別れを告げているよう
だ」との辞世の句が哀しく残る。



北庄城址・柴田公園内のお市の娘・茶々、初、江 三姉妹の像

伝 お市生存説!?

北庄城が落城する前の夜、お市
の方は、城の裏手を流れていた足
羽川から脱出し、勝久寺(坂井市
三国町)に落ち延びたという伝説
がある。寺の離れに潜伏した後、
三国湊の豪商、森田家にかくまわ
れた。森田家は信長の支援者で、
織田家を財政面から支えた商人の
一人だった。その後、お市の方は、
森田家内の旧浅井家家臣の手引き
で、近江国に移り、さらに、同じ
く浅井家の残党の浅井治郎左衛門
の案内により、伊賀の下友田に移
り住み、慶長4年(1599)に53
歳で没したという。浅井治郎左衛
門は、お市の方の死後、茶毘にふ
されたお市の方の喉仏を保管し続
け、その喉仏が現在も三重県伊賀
市の浅井長政供養塔に納められて
いると伝わる。浅井氏の残党が結
束を維持し続けるために、お市
の方という存在を必要とし、生存
説を作り上げたのかもしれない。

城 No.12

げんば
お
玄蕃尾城
(敦賀市刀根)

越前・近江(滋賀県)の県境、柳ヶ瀬峠
刀根越えに近接して築かれた山城。賤
ヶ岳の戦いの際、勝家が本陣とした。

「柴田勝家画像」
(福井市立郷土歴史博物館蔵)



城 No.13

きたのしりょう
北庄城
(福井市中央)



伝 勝家の命日には 何かが起こる!

柴田勝家の命日、毎年4月24日の夜には、首
無し武者の一隊が九十九橋を渡って南へと行進
し、その翌朝には、決まって城下に数人の死者
が出たという。数百騎ものひづめの音を、勝家
とその家臣団の亡霊と信じた福井城下の人々は、
命日の夕刻以降は、誰も外に出なかつたそうだ。
勝家は、かつての越前国主・朝倉氏とその家臣
団を滅ぼしたほか、北陸総鎮守の気比神宮(敦
賀市)を焼き払い、社家衆のほとんどを滅亡さ
せるなど、恐怖の所業を重ねてきた。人々は、
死後も異怖の存在として鎮魂の願いを持ち、そ
の霊を鎮めようと北庄城址に現在の柴田神社の
前身が建立され、祀られた。

一方、この首なし武者行列は、実は柴田家の
旧臣だったという伝説もある。普段は領民とし
て城下に暮らしながらも、お家再興の決意を新
たにするため、毎年勝家の命日には、甲冑姿で
騎乗し行進したそうだ。その際の黒い覆面行列
が首なしの正体だったとも言われている。



北庄城本丸跡周辺から福井市内を流れる足羽川に架けられた九十九
橋(つくもばし)。「諸国名勝奇賢 ちちぜんふくくるの橋」(福井県立美術
館蔵)

知将明智光秀 再起の地への想い

本能寺の変を起こし、織田信長の生涯が描かれるドラマには必ず登場する武将、明智光秀。彼が55年の人生の約5分の1を福井(越前)の地で送ったことはあまり知られていない。

光秀については謎が多いが、一説では、享祿元年(1528)、美濃国(岐阜県)明智城に明智光綱(諸説あり)の子として生まれ、15歳で元服すると、美濃の戦国大名、斎藤道三に仕えた。26歳の時、妻・熙子(ひろこ)と結婚するが、弘治2年(1556)、道三を倒した斎藤義龍(道三の嫡男)に攻められ、明智城は落城。29歳の時、光秀は美濃国から油坂峠(福井県と岐阜県の県境)を越えて越前に逃亡した。落ち着き先は、称念寺の門前だった。あばら屋での生活は困窮を極めながらも再起を窺っていた。

光秀が35歳の時、転機が訪れる。加賀の一向一揆が越前に襲来した際、光秀は朝倉軍に与し、智才を活かして勝利に貢献。これを機に、朝倉義景の客臣として一乗合に迎えられた。

中世日本の海運の要だった 越前の湊

戦国時代、特に珍重されたのが大陸から輸入された唐物だった。時には一国一城に値し、重宝(じゅうほう)や名物(めいぶつ)と言いながら、武将たちは争って蒐集していた。朝倉氏も曜変天目、朝倉(本能寺)文琳(ぶんりん)といった茶器、玉礪(ぎょっかん)筆の遠浦帰帆図(えんぼきはんず)や牧溪(ぼくけい)筆の洞庭秋月(どうていしゅうげつ)といった絵画など多くの唐物名物を所持していたとされ、室町幕府将軍・足利義政の御物(ぎよぶつ)だった天下一の名物「九十九なす」(茶人)もコレクションのひとつだった。

朝倉氏が唐物を所持していたことから、三国湊、または敦賀湊を通じての間接的な対外交渉を当時行っていたという説もある。

越前・若狭は日本海交通において重要な位置を占めており、三国湊は、日本最古の海商法規『廻船式目』に、

これが縁となって、光秀に対し、朝倉方の武将から、「光秀の居宅で歌会をこの交遊の申し入れがあった。しかし、極貧生活の光秀には、彼らをもてなす余裕などなかった。この時、妻・熙子は、光秀のために自分の大切な黒髪を売って御馳走の準備をし、歌会を成功させたという。妻の懸命な努力が光秀の仕官を叶えたのだ。称念寺には、この伝承を聞いた松尾芭蕉が感激し詠んだ句
月さびよ 明智が妻のはなしせむが碑となつて残っている。



称念寺(坂井市丸岡町)の石碑



「繪本 豊臣勲功記」(福井県立歴史博物館蔵)より、後々まで語り継がれる、光秀と妻との夫婦愛・黒髪伝説



「越前三国湊風景之図」慶応元年(1865)(みくに龍翔館蔵)幕末期の三国湊を九頭竜川左岸側から俯瞰した風景図。多くの寺社とともに、川に沿って蔵と帆船がびっしりと描きこまれ、この頃の繁栄の様子が伝わる

日本の十大港湾「三津七湊」のひとつとして挙げられ、早くから海運の要港として広く知られていた。三国には、梶、前(崎)、安島の3つの浦もあり、特に安島は、三国湊とともに日本海航路の要となる津浦だった。安島の対岸にある雄島には、古くから航海安全、外敵防衛の守護神としての大湊神社が鎮座している。

三国湊は、戦国期では河野・今泉(南越前町)の両浦もあわせて、日本海沿岸各地と越前国内を結び付ける窓口の役割を果たしていた。越前国内への輸送には九頭竜川などの河川を使い、河野・今泉の両浦から府中

その後、光秀40歳の時、

朝倉氏に見切りをつけ、織田信長の家臣となった。主君・信長が越前を再侵攻した直後の天正3年(1575)、光秀がかつて朝倉家に仕えていた頃に住み過ごした現在の福井市東大味(二乗谷朝倉氏遺跡の南西)の西蓮寺に対し、猛将柴田勝家たちから安堵状が出された。安堵状には、「この寺の者等は元の場所に帰って住むこと、理不尽なことを言う者がいれば、その者の名前を伝えよ。厳罰に処すと記載されていた。これは光秀が東大味の人々の安否を気遣い、勝家に依頼して出状させたもので、この安堵状のおかげで、西蓮寺は保護され、住民は無事に生活できたと言われている。

逆臣、裏切り者と称される光秀だが、約10年身を置いた再起の地、越前に感謝し、住民を思いやる姿こそが、光秀の本当の素顔なのかもしれない。地元住民は、かつての光秀公の恩義を忘れず、明治19年(1886)、この場所に小さな祠を建てて明智神社とした。ここに長い年月極秘に守

(越前市)への輸送には陸上となるため、馬借(ばしゃく)・馬に荷を積んで運ぶ運送業者が使われた。

一方で、敦賀湊は、古くから日本海中部以西、大陸へもつながる屈指の良港であり、日本海沿岸各地と都を結ぶ中継地として、重要な位置を占めていた。諸国から敦賀湊まで運ばれた荷は、陸揚げされ、馬で琵琶湖北岸の塩津(滋賀県)まで運び、そこから大津(滋賀県)まで船で湖上を行き、大津から京までは再び馬で運ばれた。

朝倉氏は、この敦賀に郡司を置いて、この地を掌握。朝倉宗滴をはじめ、代々朝倉総大将を務める重鎮に守備させた。



「明智光秀像」(本徳寺蔵)

り続けてきた光秀公の座像を祀り、毎年、命日の6月13日には法要を行い、遺徳を偲んでいる。



ひがしおおみやかた
東大味館
(福井市東大味町)

光秀は美濃から逃れた後、妻子を仮寓させながら、自らは旅に出て、特に堺(大阪府堺市)中世を代表する商業都市)では火縄銃を使いこなすまでとなった。朝倉家には鉄砲指南役として抱えられ、一乗合から京への大手筋に当たるこの地に居を構え、妻子とともに移り住んだ。光秀の三女ガファンヤ(後の細川忠興の正室)が誕生した地とも言われている。



江戸時代中期頃の敦賀湊。周辺諸国からの入船や問屋が軒を並べる盛況ぶりが伝わる「敦賀真景」の一部(敦賀郷土博物館蔵)

伝 三国湊城とも呼ばれた 朝倉氏の城

湊之城は南北朝期、新田義貞の重臣(新田四天王の一人)・畑六郎左衛門時能が築城。かつて天台宗寺院千手寺があったところであり、千手寺城とも言った。直下には町並み、遠くは日本海、周囲の山々をも見渡すことができる。戦闘に備えて寺を城塞化したと言われており、戦国時代には、現在の2倍の高さだったそう。朝倉氏の支城として、家臣、桜井新左衛門が居城したと伝わる。現在は、城址を示す標柱が観音堂前に建っている。

乱世に生きた義の武将

敦賀城主

大谷吉継

敦賀城は、天正11年(1583)、信長家臣・蜂屋頼隆によって築かれた。頼隆は、信長が横死した本能寺の変の後、秀吉らとともに主君の仇・明智光秀討伐に参戦し、その後は秀吉の家臣となって、天正11年(1583)4月の賤ヶ岳の合戦(柴田勝家と羽柴(豊臣)秀吉との対決)でも活躍。この武功により、敦賀城主として5万石を与えられた。蜂屋氏は「羽柴」の姓を授かり、「羽柴敦賀侍従」とも呼ばれるようになる。そして、織田家臣・武藤氏が拠点としていた花城山城(敦賀市)を廃し、新たな地に敦賀城を築いた。

天正17年(1589)、蜂屋頼隆が秀吉の九州遠征中に病没したことから、大谷吉継が入城した。

吉継は秀吉の側近として活躍。石

田三成とともに秀吉に重用され、日本海交易の要港であり北国の物資の集散地であった越前国敦賀城主となると、町並みを整備し、「太閤板」の輸送をするなど、物資調達拠点としての機能を強化した。また、地場産業の育成にも尽力し、敦賀商人たちに特権を与えて商業活動を活発にし、近世敦賀町の基礎を築いていった。

その後の秀吉の朝鮮出兵でも、船舶の調達、物資輸送の手配などで手腕を発揮し、勲功を立てた。秀吉亡き後、豊臣政権存続を賭けての徳川家康との対決、慶長5年(1600)の関ヶ原の戦いにおいて、石田三成とともに奮戦したが、小早川秀秋の謀叛などにより、大谷隊は壊滅し、吉継は戦場にて自刃した。



大谷吉継の像(みなとつが山車会館)



大谷吉継の陣
「関ヶ原合戦図屏風」(一部)(関ヶ原町歴史民俗資料館蔵)

激動の歴史を 今も伝える

丸岡城

現存する天守閣としては国内最古級で、国の重要文化財に指定されている丸岡城は、天正4年(1576)、一向一揆の備えとして織田信長の命を受け、柴田勝家が甥の勝豊に築かせた丘の上の平城である。天正11年(1583)、柴田勝家が秀吉によって滅ぼされた後は、越前国は丹羽長秀の所領となり、丸岡城主には長秀の娘婿・青山宗勝を置いた。後年、福井藩附家老・本多成重が居城し、丸岡藩として独立した。

この本多成重の父・重次は、徳川家康の三河時代を支えた「鬼の作左(やくざ)」との異名を持つ。徳川家に家康の祖父の代から歴任し、永禄8年(1565)、高力清長、天野康景とともに三河三奉行に取り立てられた。重次は、物事に妥協しない厳しい性格で、「仏の高力、鬼作左、どっちでもない天野」と評されたという。

現在、丸岡城の一角に、「一筆啓上 火の用心 お仙泣かすな 馬肥やせ」の明文の碑が建てられている。これは、天正3年(1575)、重次が長篠の戦いの戦場から妻に

送った手紙だった。合戦を控えての便りは、後に憂いを残さぬ武将のたしなみで、手紙に登場する「お仙」は、重次の子・成重(幼名・仙千代)。手紙には、家を守り、家族を愛し、忠義を尽くす思いが、簡潔にしたためられている。

この明文は、現在、坂井市が全国から一行詩を募集する「日本で一番短い手紙 一筆啓上賞」創設の契機となった。平成5年から続く「一筆啓上賞」。本多氏と福井の関わりは、今も続いている。



城 No.16 まるおか 丸岡城 (坂井市丸岡町)

伝 霞ヶ城とも呼ばれる所以

築城工事がうまく進まないために人柱を立てたという城にまつわる伝説は、この丸岡城にも伝えられている。城下町に住む片目の女が、人柱を募集していることを聞きつけ、「私が人柱となるかわりに、息子を武士に取り立ててください」と奉行に願い出たそう。片目の女は奉行との約束を信じて人柱になり、城は無事に完成したが、どういわけか、息子は武士に取り立ててもらえなかった。それからというもの、夏になると城の堀(ほり)に藻が茂り、毎年一回刈らなければならない。そしてその日は決まって、しとしと雨が降り、城の石瓦が青く見えたので、町の人々は「あら、いとしい、片目の女の涙雨」と愛おしんだ。また、町の人々は、お城には片目の蛇が住んでいるとも言い出し、それは片目の女の怨霊(おんりょう)だという。戦国時代、丸岡城を攻めるために城を調べようとすると、霞がかかり城を見ることができなくなったというが、人々は、蛇が霞を吐いて城を守ったのだと信じて疑わなかったという。それから丸岡城は「霞ヶ城」と呼ばれるようになった。

城 No.15 つるが 敦賀城 (敦賀市松島町)

敦賀城



来迎寺(敦賀市松島町)にある敦賀城東門から移築された門

現在、敦賀城跡には、敦賀市西小学校内に石碑があるほか、敦賀市内の真願寺や八幡神社境内に礎石が残っている。吉継ゆかりの品々も見ることが出来る。敦賀城は元和元年(1615)の「二国一城令」により全国に幾多ある城同様に廃城。その跡地には敦賀藩の奉行所等が建てられた。なお、敦賀は明治の廃藩置県で敦賀県になり、敦賀城跡に県庁が置かれたこともある。その後、敦賀は滋賀県入るが、後に福井県へと移って現在に至っている。

伝 吉継の忠義を感じる 敦賀城の鬼瓦

八幡神社(敦賀市三島町)には、敦賀城跡から出土した五三桐(ごさんこのきり)の家紋が刻まれた鬼瓦が残っている。五三桐は、秀吉が豊臣姓を名乗り五七桐(ごしちのきり)・太閤桐を使う前に用いていた家紋で、大谷吉継が自身の家紋ではなく桐紋を刻んだのは、敦賀が秀吉の直轄地のような存在だったことを示しているという。大谷吉継の忠義が感じられる。

中世に花開き、 武将たちに愛された 多彩な舞

天下泰平、五穀豊穡を願って、または感謝を神に伝え、神と交歓する場となる神事は、地域の伝統行事として今もいくつかが残り伝わっている。

こうした神事から華やかな民衆芸能が生み出されたとも言われるが、もともとは、奈良時代に大陸から渡ってきたさまざまな芸能が、日本古来の演技「俳優(わざおぎ)」と融合し、猿楽に発展したとの説もある。鎌倉時代には、ストーリー性のあるものも上演するようになり、並行して、大きな寺院で奉納される神事での舞、宮農に關係した田楽の舞が共存した。室町時代になると、神社や大名の援助のもと、各地で発展したと言われている。

越前・若狭では、中世以来、各地で、田楽、王の舞、獅子舞などが行われていた。



年中行事絵巻(模本)(明治時代 京都市立芸術大学芸術資料館蔵) 平安時代末期の宮廷や貴族の間で行われる儀式や神事といった年中行事を描いたもの。王の舞や田楽、巫女に、鉦や神輿などが描かれている



鎌倉時代から続く正月翁神事「水海の田楽能舞」(池田町水海) 天下安全・五穀豊穡を祈念して舞われる「翁神事」は、神事芸能のなかでも特別に神聖な舞。かつて翁神事や演能が行われた村では、現在、春を迎える祭礼、「お面様祭り」などを行い、多くのお面様を祀るとともに当年の豊作と安穩、そして一家の繁栄を祈念している



彌美神社(美浜町宮代)の「王の舞」若狭を中心に今でも毎年春に奉納される「王の舞」。大地に潜む悪霊を鎮め、豊作豊漁を祈る舞だと言われている



「洛中洛外図屏風」(国立歴史民俗博物館蔵)に描かれた能舞台 中世、大名の城館や寺社には能舞台が設置されていた。戦国大名朝倉氏の城館にも、日常生活の場と区別し儀式を執り行う空間が設けられ、小規模ながらも能舞台が設置されていたという

は江戸幕府に召し抱えられ、芸能者としては破格の待遇を受けた。

若狭においては、14世紀には、猿楽者は気山座や倉座などの座に所属し活動していた。座の長は楽頭職(がくとう)しき・特定の神社の祭祀における猿楽上演の独占と義務を持つ者)を保持し、神事猿楽を舞って礼儀を得る権利を領主から保証されていた。楽頭職を手に入れた座は、隆盛を極めたという。

若狭国主武田元光や武田氏家臣・粟屋元隆などは、こうした文化人を被官として登用し、若狭と京都の連絡役にしていった。中央との結びつきを深め、若狭の能の文化はいっそう

大きく花開くことになる。隣国丹後国においても、細川幽斎・忠興を中心とする高度な能楽文化の一翼を担ったのは、若狭から流れ込んだ武士たちだったという。



「若狭能倉座の神事能」(若狭町南前川) 若狭猿楽の伝統を受け継ぐ倉座の神事能は「一人翁」が特徴。宇波西神社や彌美神社の風折能などで演じられている



福通寺(越前町朝日)の「敦盛」の一節を描いた算額 福通寺には幸若舞にゆかりの深い「梵鐘」も伝わっている



「廣嶺神社獅子頭」(鎌倉時代 廣嶺神社蔵) 小浜市千種の廣嶺神社に残る獅子頭。中世には、この獅子頭を用いた獅子舞が行われていたと考えられる

特に越前では、室町時代に能が大成される以前から、猿楽が相当発達していたとされている。そこで多くの能面が製作され、中央でも名の通る著名な猿楽面製作者(面打)や猿楽者を輩出した。その伝統は、平泉寺の僧であり能面師でもあった三光坊へと伝わり、江戸時代の能面師三大家系(越前出目家、近江井関家、大野出目家)へと継承された。

越前猿楽は、応仁の乱後に越前国主となった朝倉孝景によって保護奨励され、中央の猿楽一座との交流を深めることで芸を磨き水準を高めていった。近世に入って編纂された『近代四座役者目録』においてわざわざ「越前者」を項立てするほど、この時代の能のなかでも特別な位置を占めていたとされる。中世末期には、舞いながら節を付

けて語っていく曲舞(くせまい)が武士の間で流行した。越前を拠点とした幸若舞(こうわかまい)は、大きな勢力を持った曲舞の一派で、早くから他の曲舞とは別格の扱いを受けていたと言われている。都での名声とともに朝倉氏の庇護を受け、さらに朝倉氏滅亡後も戦国大名との結び付きが強く、天正3年(1575)には一向一揆殲滅のために越前の豊原寺(坂井市)に陣を取った織田信長の前でも幸若が舞った記録が残っている。信長の幸若好きは有名で、特に「敦盛」を好み、自らも舞ったという。幸若舞の始祖・桃井直詮は、信長や柴田勝家、丹羽長秀、豊臣秀吉からも知行を拝領し、後年

伝 幸若舞と幸若丸

幸若大夫の祖は、桃井直詮(ものいなおあきで、童名を幸若丸)といった。母は越前の藤島某の娘、祖父は南北朝期、南朝方に味方して敗れ、北畠山に身を隠す。そこで幸若丸は祖父とともに密かに武事を習った。その余暇に「八島軍記」という草子に節をつけて朗吟すると、天性の美声と絶妙の音調が聴く者を感嘆させたという。このことが御上に聞こえ、召されて曲を奏したところ感心されたうえで桐菊の御紋を賜り、かつ36冊の本に節を付けるよう仰せられた。幸若丸は「祖父は一国の領主であり、わたしの代になって音曲家になるのは武門の恥である」と辞退。しかし御上は「お前の家は末代に至っても芸人とはしないから音曲を廃するな」と重ねて仰せられた。幸若丸は固辞し難く、年久しく白山権現にこもっていると、ある日、八島曲中ホロ口の一節を悟り、これは神助である大いに喜んだという。この後、御上に召され、この曲を奏したところ、御感のあまり幸若音曲の名称を賜り、末代まで諸大夫にする旨を仰せられた。これより、幸若音曲の名が天下に知らされたという。

京の北の玄関口 若狭国

若狭国は京に近く、さまざまな人と文化が行き交った地。小浜湊という天然の良港を持つ小浜は日本海交易の中心として栄え、応永15年(1408)には南蛮船が着岸し、積んでいた象牙孔雀などの珍奇な動物をひと月かけて京まで運んだという。

京へ通じる道は、若狭街道と呼ばれる、朽木(くつき)街道(若狭の九里半街道から近江国に入り、朽木峠を越えるルート)、鞍馬(くらま)街道(近江国との国境・針畑峠を越えるルート)、長坂街道(丹波国を通るルート)の3系路で、いずれも馬借を使った。また九里半街道から西近江路は、琵琶湖の湖上舟運を利用するなどして物資を運搬した。

戦国期の若狭には、網や漁場を管理・運営した大網・枕網・大戸網と称する惣中(そうちゅう)・村の自治

組織)が形成されており、網漁が相当発展していたという。この地の鰯、鯛、エイ、鮑、サザエなどの魚貝は「美物(びぶつ)」と称され、都の武家や公家から珍重された。若狭国を治めていた武田氏も、将軍家への初物や歳暮などのために「美物」を調達したと伝わっている。



「紙本金地著色南蛮図屏風」(左隻)(神戸市立博物館蔵)に描かれた南蛮船からの象など

乱世に翻弄された

名門武家 若狭武田氏

若狭国は、京に近いという地理的条件からも、中央の要請を受け、たびたび国外出兵を余儀なくされた。若狭守護職・武田氏の初代、信栄は、永享12年(1440)、室町幕府6代將軍足利義教の密命で、一色義貫暗殺を果たし、その恩賞として若狭国守護職を与えられた。信栄は若狭小浜を拠点として若狭を統治しようとしたが、病にて若狭を没したため、弟・信賢が若狭統治の基盤を築いた。

若狭武田2代信賢の時代には、大膳大夫(だいでん)だゆう・官職、大膳職の長官)の名乗りを許され、丹後国守護も兼務。さらに4代元信からは、伊豆守を兼任し、一族の中では最も高い位にまで上りつめた。しかし、国内統治は安定せず、土一揆や反乱など苦しい戦いを強いられることになる。5代元光がその家督を継いだ後も若狭周辺は騒乱の渦中で、海賊や丹後勢の乱入、武田家臣の中

でも最大勢力を誇る粟屋氏の謀叛など、内外ともに緊迫した状況が続いた。一方でその頃は、若狭武田氏全盛期とも言える時代で、幕府防衛軍として有力家臣の逸見(へんみ)氏や粟屋氏を中心に、時には集合・編成するなどして、隣国京都にたびたび出陣した。また、元光は大永2年(1522)、後瀬山に本城を築き、丹後国からの攻撃に備えながらも、麓の武田館では、茶会や歌会を催したという。文武両道の武将であった。

その後、6代信豊と7代義統の間で争いが起こり、信豊が大敗すると、代々若狭武田氏の家臣であった逸見昌経は若狭武田氏を攻撃。若狭武田氏は、越前国主・朝倉氏の援助なしでは若狭国の統治を続けられなくなった。若狭武田氏は8代元明が最後となるが、元明が朝倉義景によって越前に拉致されたこともあって、武田氏家臣の多くが織田信長の配下となった。

天正元年(1573)、信長が朝倉氏を滅亡させたことと、武田元明は一乗谷を攻めた若狭衆によって若狭に帰還したが、神宮寺(小浜市)に蟄居させられ、若狭の守護職の復権は許されなかった。同年に若狭国は、柴田勝家と並ぶ猛将として知られる丹羽長秀に与えられた。

元明は、神宮寺で妻・京極竜子とともに暮らし、伝承では子をもうけたと言われている。神宮寺近くには、



「被巻包仏一枚胴具足」(伝松の丸殿着用)個人蔵
武田元明の正室・京極竜子着用として伝わる具足

「武田元光画像」(発心寺蔵)



城17 後瀬山城

のちせやま (小浜市青井)

若狭武田氏5代元光が家督を継いだ頃より強固な城が必要であるとして後瀬山に築城したと言われている。城主は元明が永禄10年(1567)に越前へ拉致されるまでの4代46年間、若狭守護の本城として存続した。天正元年以降は、若狭国主となった丹羽長秀、浅野長政、木下勝俊などが居城。慶長5年(1600)に京極高次が若狭国を治めることとなり、新たに海に面した地に小浜城が築かれると後瀬山城は廃城となった。



城18 天ヶ城

てんが (小浜市羽賀)

粟屋氏や逸見氏などと並ぶ若狭武田氏重臣・内藤勝行が居城。内藤氏は織田信長に通じており、元龜元年(1570)の信長の越前侵攻に際しては、若狭国の他の武将とともに県境近く(若狭町熊川)まで信長を迎え出している。以後、丹羽長秀の手に属し、各地を転戦。朝倉没後の天正3年(1575)8月には、信長軍の水軍として越前の浦々を攻撃した。一方、若狭国内では武田家臣同士の間で領争いが過熱し、各所において戦いが繰り返され、この城も例外なく戦場となった。

城19 箱ヶ岳城

はこがたけ (若狭町堤)

天ヶ城城主・内藤氏の一族、内藤国高が初代城主。若狭武田氏5代元光までの3代にわたり仕え、武田家重臣の中でも屈指の武将だったと伝わる。軍事面でも粟屋氏と並ぶ戦闘集団を持ち、若狭中枢部で大きな勢力を誇っていた。

伝 この地では瓢箪を栽培しない!?

箱ヶ岳城の地域では栽培しないものがある。それは、城主が合戦の最後を華々しく飾ろうと馬でこの地を降りて奮戦した際、シャクという瓢箪に似た草が馬の脚にからみつき、馬とともに転倒。そこを鐘で突かれ、はかなく戦死してしまったという伝説から、土地の人々は今でも瓢箪を栽培しないそうだ。

城20 高浜城

たかはま (高浜町事代)

平山城と水城を兼ねた斬新な縄張りの高浜城は、北・東・西の三方を海に囲まれ、立地的には海城の要素も備えていた。逸見氏は後年、水軍を軍事力の中心に据えたことから、この水軍を活かし、巻き返しを図るために築かれた城との説がある。「高浜八穴」のひとつ、明鏡洞がある城山公園に城跡があり、その山に濱見神社がある。



海に突き出た半島を巧みに利用した高浜城

伝 逸見昌経の遷宮と伝わる 佐伎治神社の「雨乞鐘」

神社には、平安時代末期から鎌倉時代初期の作とされる「雨乞鐘」とも呼ばれる和鐘がある。干ばつが続くとこの鐘を海辺に運び出し、海中に浸けると雨が降ると伝わっている。もともと姉妹の鐘だったが、姉鐘は沖合に沈んでおり、妹鐘を鳴らすと姉鐘を慕って「アネゴーン」と悲しい響きで鳴くという。

若狭武田氏重臣 逸見氏の城

若狭武田氏は強力な家臣団を編成し、応仁・文明の乱の京都の戦いに出陣。その武田軍の主要部隊であったのが逸見一族だった。逸見一族は、碎導山城(さいちやまじょう・高浜町)を拠点として活躍したが、武田元信の家臣でありながらも隣国・丹後国の守護代・延永氏と組んで若狭を攻めるなど度々謀叛を起こした。天文7年(1538)6月にも再び武田氏

に反乱を起こし、さらに永禄4年(1561)には若狭武田氏の重臣・粟屋氏と組んで、当時の若狭守護・武田義統と朝倉氏連合軍との合戦に及んだ。この時、碎導山城は落城したが、逸見氏は永禄8年(1565)高浜城を築き、これを本拠地とした。元龜元年(1570)、織田信長の越前侵攻以降は、昌経が亡くなった天正9年(1581)まで信長の与力として各地を転戦した。

朝倉氏との10年に及ぶ 籠城戦を耐え抜いた

難攻不落の 国吉城

若狭国と越前国との国境防衛拠点となつた国吉城。南北朝期の古戦場としても知られるが、特に、越前・若狭の統一を狙って若狭に攻め入ろうとする朝倉氏の軍勢を10年近くにわたって撃退し続け、壮絶な籠城戦を展開した粟屋勝久の武勇伝は、今も地域で語り継がれている。



「伊予札段替二枚胴具足」(田邊半太夫家具足)(若狭国吉城歴史資料館所蔵)国吉城主粟屋越中守の家人・田邊半太夫家に伝来した具足。田邊氏は国吉城に籠城し、朝倉氏の攻撃に対して応戦し活躍した

織田信長の最初の越前侵攻は元亀元年(1570)4月。家康や秀吉などとともに近江から越前に入った信長の軍勢を若狭軍勢が出迎え、膳部山城主・松宮玄蕃の居城にて一夜を明かし、国吉城に入城した。粟屋

勝久は城の手前の倉見峠で時の覇者・信長を出迎えている。2日ほど逗留し、この間、信長に同行していた秀吉が列席した皆の前で粟屋氏の籠城戦にふれ「自分もあやかりたい」と讚えたと伝えられている。しかし、この時の天筒山城、金ヶ崎城攻めでは、諮らざるも信長の義弟・浅井長政の裏切りにより退去せざるを得ない事態となつた。

陀堂を見ることができ。

勝久は、その後、信長家臣、さらに秀吉家臣として各地を転戦し活躍した。国吉城跡麓の「若狭国吉城歴史資料館」では、さまざまな資料や

天正元年(1573)、信長による再度の越前進攻・朝倉討伐は、刀根坂から越前・一乗谷へ。粟屋勝久は、一乗谷一番乗りの武勲を挙げたと伝わる。この時、勝久は若狭国の逸見氏とともに数百艘の兵船で出立、三国の海岸に上陸し、陸路を北上して進攻してきた明智光秀勢と合流。途中の河野城を攻め落とし、馬借街道から府中に入つて、その勢いで一乗

発掘調査出土品を展示。模型や写真、パネルで国吉城とその城下(美浜町佐柿)について紹介している。

陰陽道を伝える

安倍家

古代、日本には、中国の陰陽思想や占術などを元に、仏教や神道の要素も取り込んだ日本独自の陰陽道という思想があった。

陰陽道の祖・安倍晴明は、呪符や人形を使って驚異的な呪術を展開したと言われ、陰陽師として名声を極めた。その宗家・安倍家(土御門家)は、室町時代後期からの相次ぐ戦乱、京の荒廃によって、若狭武田氏の重臣・粟屋氏の援助を受け名田庄(おおい町)に疎開し、3代にわたり移り住んだ。慶長5年(1600)に帰洛するまで約100年間、名田庄を厩造りの拠点とし、この地に留まりながらも中央の諸祭祀を行ったと



星の動きを知る「天動儀」(おおい町厩会館蔵)

いう。陰陽道は、豊臣政権下では弾圧されたが、太平の世となつた江戸時代に入ると、徳川家康の庇護により、安倍家は再び絶頂期に入る。明治政府によって廃止されるまで「土御門神道」として広く知られるようになった。

名田庄には、現在も土御門館の跡と陰陽道祭祀・儀式の場である天壇が存在する。また、敦賀市相生町の晴明神社社殿内には、安倍晴明が陰陽道の研究に使つたという「祈念石」がある。



安倍家ゆかりの地にて今も行われる儀式「土御門祈禱祭」おおい町名田庄にて毎年8月開催される「星のフィエスタ」では、平安時代の「星占い」の儀式が厳かに再現されている



「具注曆(ぐちゅうれき)」(おおい町厩会館蔵)具注曆には、季節や年中行事、吉凶などを示す言葉(曆注)が記されている

若狭武田氏重臣・粟屋勝久が居城。信長、秀吉、家康の三英傑を迎え入れた難攻不落の城。



城 No.21 若狭国吉城

わかさくによし

(美浜町佐柿)

伝 国吉城の 涙にまつわる悲話

国吉城は防衛のため、付近の峠の麓に水を流すことのできる溝に築かれたと伝わる。ひとりの娘が機織り機を背中に負って峠を越そうとした時、池二面には氷が張っていた。娘が渡りかけると氷が割れ、機織り機とともに水の中に沈んでしまった。その後、池の中から機を織る音がするようになったという。村人たちは娘を憐れに思い、碑を建てて供養したところ、機織りの音はしなくなったそう。人々はこの池を「機織り池」と呼び、娘を祀って機織姫神社を建てたとされるが、今はその名残はない。

伝 投げ石城と呼ばれる所以

攻め上がる朝倉勢を迎え撃つ粟屋勢は、籠城戦に備え、城中に石地藏や石卒塔婆、板碑を多く運び込み、それらを籠城中に朝倉勢めかけて投下した。国吉山上からの石弾は、おそらく籠城した10年を通じて2千個は下らなかつたろうとされ、後に国吉城は「投げ石城」とも呼ばれるようになった。

中世の巨大宗教都市 平泉寺の 栄枯盛衰



中世には、戦国大名と対等な力を持った寺社があった。領地拡大に励み、学術、武術、技術に加え、財力をも備える強大な力。養老元年（717）、修行僧・秦澄によって開かれたとされる平泉寺もその一つである。

平安時代後期になると、比叡山延暦寺の末寺として国家鎮護の権威をふるい、さらには武士の争いに乗じ、優勢勢力と結び付くなど勢力を拡大。寺社は「夜討ち・強盗の輩」が逃げ込むアジール（避難所）にもなっていたため、その影響から寺僧たちも武装化し、軍事力を強めていった。

経済面では、広大な所有地をもとに収納した米銭を有効活用し、金融活動（高利貸）を営んでいた。越前加賀をまとめるほどの実力が備わること助勢を申し出る者も多く、他の勢力に対して時には協力し、時には裏切りを繰り返しながら寺運隆盛を歩んだ。

越前での戦いでは、平泉寺が味方した方が勝利するという歴史が繰り返

返され、境内拡充、伽藍建造、坊院の充実をさらに進めることで、朝倉氏の拠点である一乗谷とともに栄華を誇ることになる。

朝倉孝景が全国でもっとも早く戦国大名になり得たのは、その背後に平泉寺という巨大な力があつたことが大きいとも言える。



【中宮白山平泉寺境内図】
（平泉寺白山神社所蔵）

自立した支配権を保障された平泉寺。さらに朝倉氏の権力を利用して勢力を拡大していくのだが、朝倉氏が織田信長から攻撃を受けるようになる。朝倉氏を裏切って攻撃した。さらに比叡山焼き討ちから2年後、勢いに乗った信長の軍勢により一乗谷は灰燼に帰し、朝倉義景は最

後に平泉寺を頼ったが裏切られ、大野に落ちて自刃。ついに朝倉氏は滅亡した。

その時を待っていたかのように、天正2年（1574）に一向一揆勢が越前になだれ込んでくる。朝倉氏が築き、信長が継承していた武士による戦国大名的支配秩序を解体したのは、この国中で起こった一揆だった。生き

残っていた朝倉氏旧臣をこごとく攻撃。やがて平泉寺もその大波に飲み込まれ、一揆方の屈強の決死隊によって陥落する。一揆のところがまわぬ放火によって、平泉寺は全山焼失した。その後、意気上がる一向一揆勢は、越前の大谷寺や永平寺をはじめとする非本願寺派寺院を次々と焼き討ちし、越前の嶺北地域を支配下に収めることで、越前は加賀と同じく「一揆持ち」の国となった。

しかし、本願寺の統制下に置かれ自立した領国形成の思惑は外れ、一揆との対立を生む。



むろこやま
村岡山城
（勝山市村岡町）

平泉寺近くの村岡山（御立山）には、平泉寺と対立した一向一揆勢が築いた城跡が今も残っている。勝利した一向一揆勢がこの村岡山を「勝山（かちやま）」と呼ぶようになったことが、現在の地名の由来となったと言われている。



戦国時代を席卷した 一向一揆の拠点



吉崎御坊に建つ
蓮如像

朝倉氏の戦いと言えば、領土拡大にはつながらなかったものの、一向一揆や近隣大名との争い、内紛は絶え間なく続いていた。特に一向一揆には百年近く悩まされた。

一向一揆は、親鸞聖人を祖とする浄土真宗本願寺教団の門徒が主体となって団結し、門徒の国を創建すべく立ち上がったもので、その起因となったのが、卓越したカリスマ性で民衆を導いた蓮如の存在だった。

浄土真宗中興の祖とされる蓮如は、京都東山の大谷本願寺を拠点として精力的な布教活動を実施。これにより大きな門徒集団が形成されていった。しかし、もともと蓮如のすすめる浄土真宗の教義を認めない比叡山延暦寺から弾圧され、大谷本願寺を破却されてしまった。各地を流浪した蓮如は越前の吉崎を新天地と定め、文明3年(1471)、吉崎に坊舎を建立した。

応仁の乱を経た混乱の時代に、蓮

如は、親鸞聖人の教えを一般民衆に

分かりやすく伝える「御文(おふみ)」を使った独自の布教活動により勢力を拡大。吉崎は参詣する人々であふれ、幾千万にもなったという。坊舎の周囲には門前町が形成され、吉崎は一大宗教都市となった。

しかし、大勢の門徒のなかには、他の神仏を排除し「阿弥陀如来への念仏こそすべて」とする熱烈な信者がおり、他の信仰勢力との軋轢が生まれ敵視された。また、地侍など本



吉崎御坊跡(あわら市吉崎)

願寺の力を利用したい武家門徒が年貢を未納するなど、領主との対立を引き起こす者もいた。

暴走していく門徒たちを何度諫めても勢いは止まることがなく、蓮如の想いとは裏腹に、信仰生活を離れた門徒たちによって一向一揆が武力蜂起。蓮如は失意のうちに吉崎を退去することになった。4年間の滞在だったが、自身が書いた「南無阿弥陀仏」の名号や御文の数は、吉崎滞在中が最も多かったと言われている。

村々には、信者が集まり御文を拝読し話し合う「講(こう)」という宗



「吉崎山古絵図」(照西寺蔵)

ていた。永正3年(1506)の九頭竜川の大戦をはじめ、一向一揆との戦いは当時の二大勢力の争いとなった。

朝倉氏滅亡後は、天下布武を目指す織田信長との戦いとして、新たな局面を迎えることとなる。

信長没後の豊臣政権の下で、天正19年(1591)に本願寺は京都に移転・再興。本願寺だけではなく、各地の本願寺寺院もようやく勢力を取り戻していった。信長時代に対立していた他の寺院も同様の庇護を受け、一向一揆によって打ち壊された平泉寺も秀吉によって復興した。

一方で本願寺は、顕如を継いで本願寺12代宗主となった准如の西本願寺と、徳川家康の支援を受け教如によって創建された東本願寺との二つ

教的共同体が存在し、さらに集会場

として設けられた特別の場は「道場」と言い、道場がさらに大きくなると、本願寺の許しを得て「寺」になった。この組織化が強靱な勢力となり、一向一揆の巨大な力の源となった。現在も越前各地には、地域の深い信仰心と連帯を象徴する「講」や「道場」が残り、報恩講やお斎(おとき・会食、報恩講料理としても知られる)など、地域の大切な行事として今も連綿と続けられている。

隣国の加賀では文明6年(1474)に一向一揆が蜂起し、門徒たちと加賀国(石川県南部)守護・富樫幸千代、その兄・政親との対立が続いた。長享2年(1488)、高尾城(石川県金沢市)にて正親が討たれると、加賀国は一向一揆の国となった。

その頃の越前国は、一乗谷を拠点とする戦国大名朝倉氏の領国になった。蓮如の布教の地・吉崎にも、二つの本願寺が隣り合わせて存在している。京都同様、東本願寺(真宗大谷派吉崎別院)を「おひがしさん」、西本願寺(浄土真宗本願寺派吉崎別院)を「おにしさん」と呼び、今でも親しまれている。

伝 信仰の拠点となった道場



木根橋道場(勝山市北谷町木根橋)

天正年間、石山本願寺を信長の攻撃から守ろうとしていた本誓寺(石川県松任市)住職は、信長の命を受けた柴田勝家の軍勢と戦い、敗れてこの木根橋村にたどり着いた。追手が来ると、村人はこの住職を村一丸となってかくまい、この間に住職は庵を結んで村人に仏法を伝えたという。やがて信長の軍勢が迫ってくると知らせを受け、さらに奥の小原村へと逃れた。しかし、平泉寺の密告により、ついに織田軍に捕らえられ殺害されてしまう。遺骸は、小原・木根橋村の門徒衆によって丁寧に葬られ、両村に墓を建てた。後年、ここに道場を建て、今に続いている。



住職が織田の軍勢から身を隠したと伝わる岩の割れ目。小原道場(勝山市北谷町小原)近くに残る



顕如堂と呼ばれる「木吉道場」(福井市吉山町)石山合戦時、時の本願寺11代宗主顕如を援助し、多大なる功績をあげたことを讃えられ、顕如直筆による「帰命尽十方無碍光如来」の尊号を下付されたことから「顕如堂」と呼ばれる。蓮如上人の名号も地域の宝物として保管しているという



報恩講料理

本願寺と加賀一向一揆、越前朝倉氏の動き

- 長祿元年(1457) 蓮如が本願寺8代宗主となる。
- 寛正6年(1465) 蓮如は近江で精力的に布教活動を展開し、本願寺勢力を拡大するが、近江の比叡山延暦寺に本拠・大谷本願寺を破却され、各地を転々とする。
- 応仁元年(1467) 幕府管領家、将軍家の家督争い等が激化し、京都で応仁の乱が勃発。争いが各地に広がる。
- 文明3年(1471) 蓮如が越前にて吉崎御坊を創建。同年越前国は朝倉孝景が事実上の国主となる。
- 文明5年(1473) 南加賀の守護・富樫正親が、弟・幸千代との家督争いに敗れ、国外追放となる。
- 文明6年(1474) 富樫正親が本願寺門徒と組んで武装蜂起。加賀一向一揆勃発。
- 文明7年(1475) 富樫正親が蓮如ら本願寺門徒と対立。蓮如は越前を退去。
- 文明9年(1477) 京都を中心に11年続いた応仁の乱が和睦の結果、西軍が解体され取束。
- 文明12年(1480) 本拠・本願寺を京都山科に移す。
- 長享2年(1488) 加賀において大規模な一向一揆発生。富樫正親は自害に追いやられる。以後100年近く加賀一国を門徒が統治。
- 延徳元年(1489) 蓮如は本願寺宗主を実如に譲り、山科本願寺に隠居。
- 明応8年(1499) 蓮如、山科本願寺にて死去。
- 永正3年(1506) 本願寺宗主9代実如が、幕臣・細川政元の要請を受けて門徒に挙兵を命令。越前の九頭竜川で、一揆軍と朝倉宗滴を総大将とする朝倉軍が激突。この戦いで勝利した朝倉軍は、吉崎御坊をはじめ本願寺門徒の主要な寺院を破却した。しかし、朝倉氏と一向一揆との抗争は続く。
- 天文元年(1532) 細川晴元と法華宗徒により本拠・山科本願寺が炎上。本願寺は大阪(石山御坊)が本拠となる。
- 天文4年(1535) 細川晴元と本願寺が和睦。晴元は翌年幕府管領となる。
- 永祿10年(1567) 後の室町幕府最後の将軍・足利義昭のとりなしにより、越前朝倉氏5代義景が加賀一向一揆と和睦。
- 元龜2年(1571) 朝倉義景の娘が本願寺教如と婚約。
- 天正元年(1573) 信長による2度目の越前侵襲により、朝倉氏滅亡。その後まもなく、越前で一向一揆が蜂起。
- 天正2年(1574) 織田信長により越前一向一揆鎮圧。
- 天正8年(1580) 本願寺11代宗主顕如が織田信長と和睦。しかし、信長家臣・柴田勝家らが和睦を破って加賀に進軍・鎮圧。加賀は信長のものとなり、約100年にわたる一向一揆の時代が終焉。本願寺が降伏し、全国の門徒に対して武力蜂起を停止させ、終結していった。

日本一の 曹洞宗大本山

永平寺と

創建のきっかけをつくった

波多野氏

南北朝の動乱期、天皇から日本曹洞宗第一道場の勅額を賜わり、江戸時代に總持寺(神奈川県)とともに曹洞宗大本山となった永平寺。すでに鎌倉時代にはさまざまな人々が参詣したとされ、布薩説戒(ふさつせつかい)・修行僧が戒本を読み上げ抵触していないか確認し、反省、懺悔する)の儀式の際には、五色の雲が境内の中央の正面障子にたなびき、人々が見物に訪れたという。

この永平寺の開祖・道元を越前に勧誘したのが、鎌倉幕府幕臣の北条氏家臣・波多野義重であった。義重は、承久3年(1221)の承久の



乱で活躍。右目に矢を受けながらも敵に矢を射返して奮戦し、この時の恩賞として越前国志比庄(永平寺町)を拝領。この地を寄進するなどして寺院建立に貢献した。義重は、鎌倉御家人の在京人として中央で活躍したが、その子孫は志比庄の館に在住した。館の周辺には山城である波多野城が整備され、今もその跡が確認できる。波多野氏の子孫は代々、永平寺の檀家筆頭に位置付けられ、仏殿内には波多野義重像が祀られている。

そして、永平寺は寛元2年(1244)の建立以来、数度の大火に遭うも、その都度再興され現在に至っている。たとえ成仏したとしても、さらなる成仏を求めて無限の修行を続けることこそが成仏の本質であるという「修証一如」、釈迦に倣い、ただひたすら坐禅に打ち込むことが最高の修行であるという「只管打坐(しかんたざ)」を主張した道元の教えは今も受け継がれ、永平寺では多くの修行僧や雲水たちが読経と座禅の日々を送っている。寺内には道元が中国からの帰国後に初めて著した宗教書「普勸坐禅儀(ふかんざぜんぎ)」(附「普勸坐禅儀撰述記」)も大切に保管されている。



「道元禅師画像」(宝慶寺蔵)

城 No.23 はたの波多野城 (花谷城)

山城は、戦国乱世に備えて越前朝倉氏が手を加えたとも言われ、一乗谷城のように山上の郭を多くの堀切、堅堀・畝状堅堀が取り巻く堅固な造りになっている。天正元年(1573)の織田信長による朝倉氏討伐時に廃城となった。

伝 永平寺の難を救った五百羅漢

その昔、織田信長が北陸を攻略して永平寺に攻め寄せた時、時の禅師は修行僧が退避するまで待ってくれと願い出た。信長はこれを許してその退散を待たず、修行僧は終日出てその後が絶えない。さすがの信長も包囲を解いて帰ってしまったという。この話は、永平寺の山門楼上に安置してある五百羅漢が修行僧に化身して永平寺の難を救ったと伝えられ、十六羅漢像の一つには、今も刀傷が残り血がにじんでいるとか。

伝 永平寺へと続く道

永平寺開祖・道元が辿ったと伝わる、入越して最初の道場とした吉峰寺(永平寺町吉峰)から永平寺に続く道がある。戦国時代の永平寺周辺は、朝倉氏の拠点・一乗谷にとって防衛上重要な地であったことから、朝倉氏が永平寺と志比庄上郷(永平寺町)の間の道を整備したとされ、その後も永平寺へと続く道はいくつか整備された。松尾芭蕉が吉崎から永平寺へと旅した道もあり、その途中で芭蕉が立ち寄ったとされる永平寺末寺・天竜寺門前に芭蕉塚が残っている。



個性豊かな城の形式 当時の城を4つに分類

山城

戦略上のポイントに整備する戦いのための城。尾根上を利用して天然の要塞。強固な防御力を誇るが住むには不便。南北朝から戦国時代までは、城と言えは山城が主流だった。朝倉氏の城造り技術は、『築城記』にまとめられ、後に築かれた他国の山城の大本となったと言われている。『築城記』第43条に「山城には堅堀しかるべく候」と記述されているとおり、一乗谷城には、防衛のための畝状堅堀が140条以上ある。

平山城

領地を治めるための拠点として、なだらかな丘陵地などに築かれた城。戦国時代終盤から多く築かれた。「丘城」とも呼ばれる。石垣を築いて大きな天守閣を持つ城は、大名の權威の象徴でもあった。丸岡城がこの形式を用いている。

平城

平地に築かれた城。戦乱が落ち着いた江戸時代初期に多く築かれた。城下町の政庁としての機能を持っていた。福井城が平城にあたる。中世は「ひらじょう」と呼んでいた。

水城

河川や海、湖の水辺に城を築き、天然の水堀として防御力を高めた。浮城とも呼ばれていた。雲浜城と呼ばれた小浜城がこれにあたる。

戦国大名朝倉氏の始まりと長期政権の理由

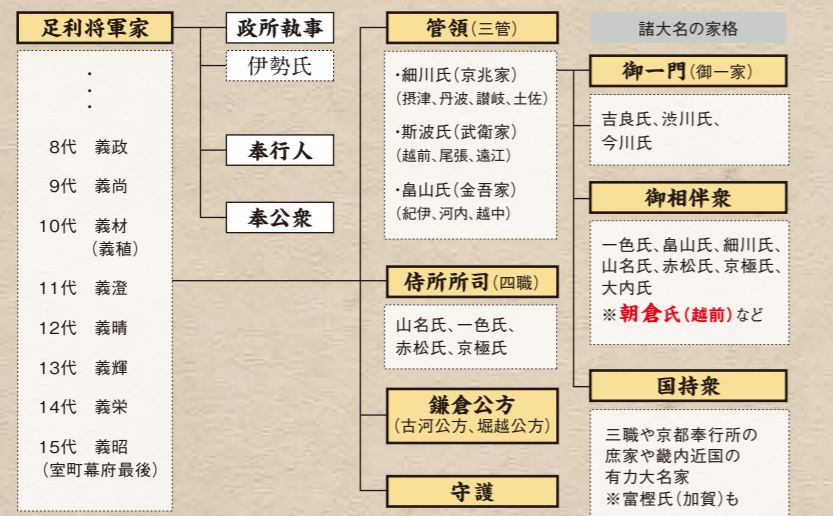
手段選ばぬ下剋上

下位の者が上位の者を倒して上下関係を侵す行為が下剋上。応仁の乱後、騒乱は全国に飛び火した。文明3年(1471)、戦国大名のさきがけとなった朝倉孝景は「下剋上の元祖」と呼ばれることもある。

戦国時代のルール 軍規・軍律

武将たちが手柄を上げようと抜け駆けするものや、規律を守らないものを取り締まるために制定した軍規・軍律。さらに越前朝倉氏初代・孝景は「朝倉孝景条々」という朝倉家家訓をもって国を治める基本とした。

室町時代後期の幕府体制



ふくい戦国 豆知識

一乗谷に平和で華やかな文化が開花していたものの、各地の大名たちは天下取りに野心を燃やし、領地の奪い合いに明け暮れていた。戦において守りの要となる城の造りとは？
知ればますます歴史が面白くなる
“戦国ふくい豆知識”を紹介!

山城はこのような 防御施設で構成されている!

曲輪(くるわ)

山肌を人工的に削平した平坦地で、虎口(こぐち)という出入口を門で封鎖する。中心的な曲輪は、一の丸・二の丸・三の丸といった名前が付いている。主要なところは指令本部となる城主の居所となつて、最終防衛線となるところ。

畝状堅堀(うねじょうたてぼり)

斜面に対して縦に造られた堀が横に連続しているところ。敵の侵入を困難にするためのもの。一乗城山に設けられた畝状堅堀の数は約140条あり、日本最多級と言われている。

堀切(ほりきり)

屋根伝いの侵入を防ぐために、尾根を遮断した堀を言う。

伏兵穴(ふくいあな)

侵入してきた敵を不意打ちするために潜む穴。

櫓(やぐら)

曲輪の近くなどに建てて物見や攻撃ができる。一乗谷城では「月見櫓」がある。

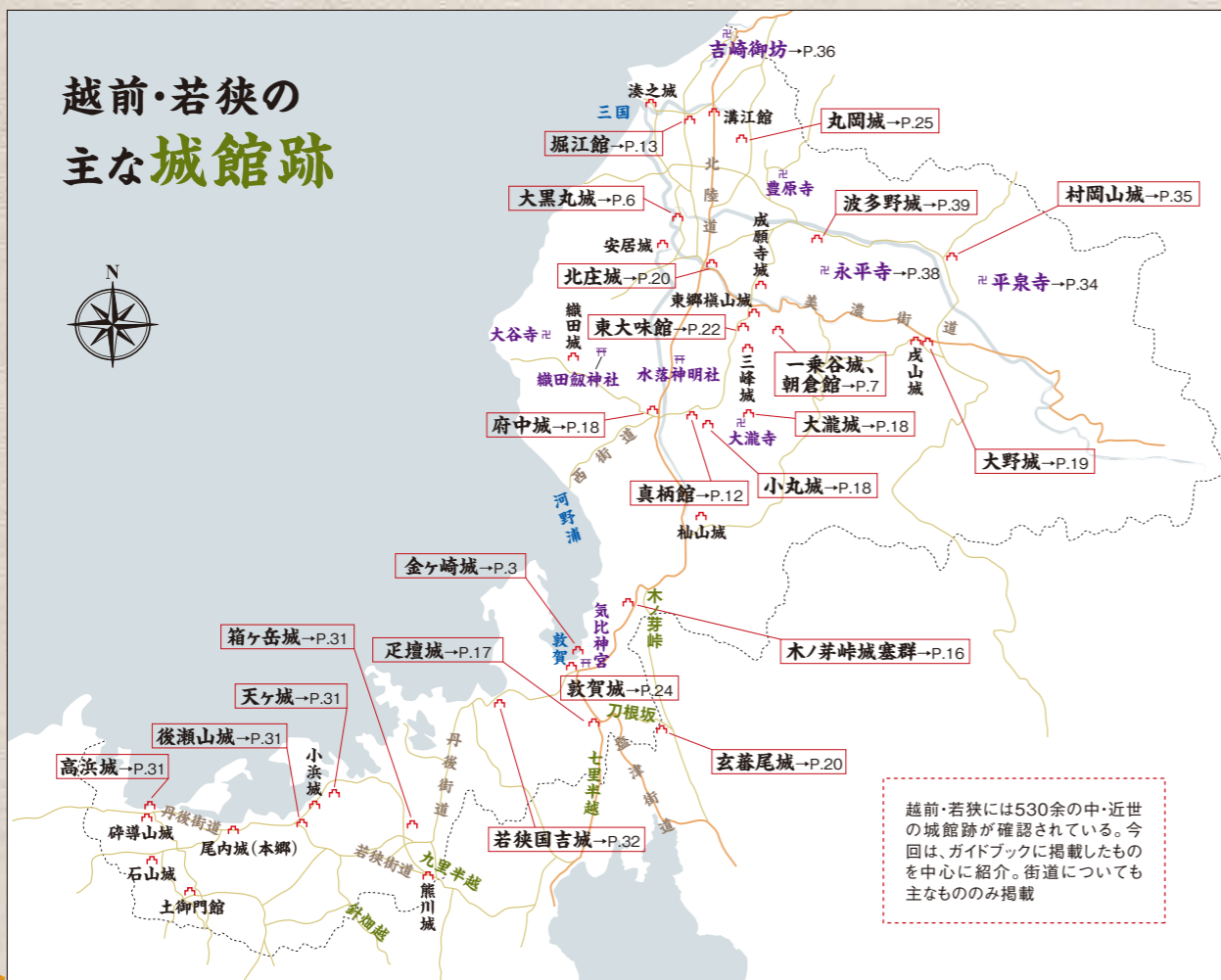
千畳敷(せんじょうじき)

山上に近い山腹に広い平坦地を造つて、大きな館を建てたところ。主郭として城主の居所となるところ。

馬出(うまだし)

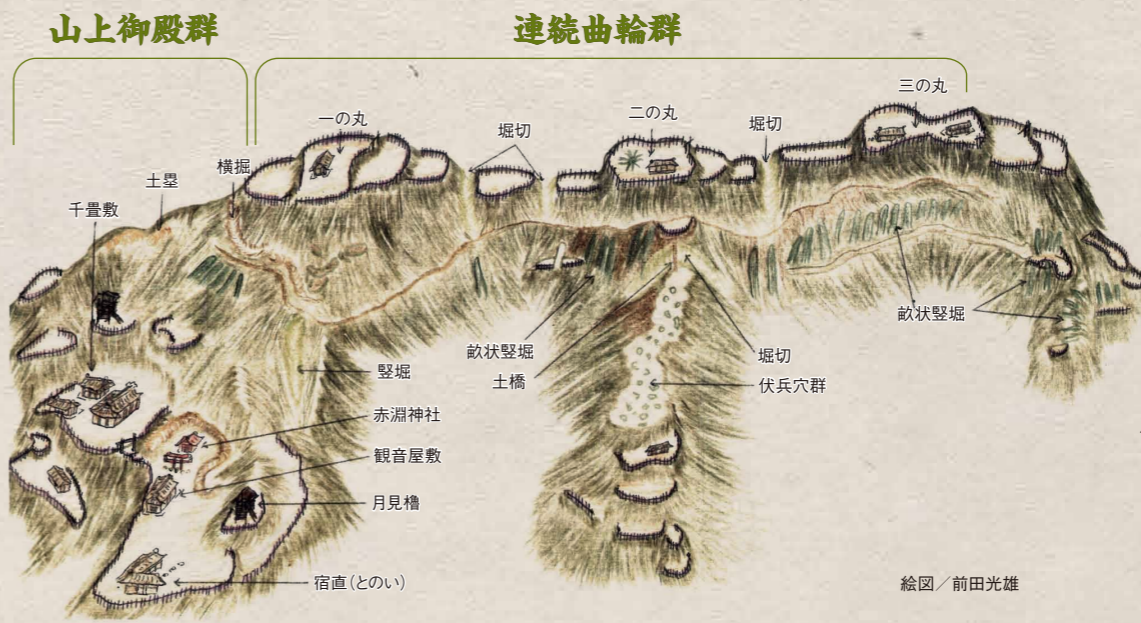
入口への侵入を困難にさせるために入口の前に設けた平場。射撃陣地としての防御のほか、出撃にも使用。巨大なものも存在する。形も半円や四角いものがある。

越前・若狭の 主な城館跡



越前・若狭には530余の中・近世の城館跡が確認されている。今回は、ガイドブックに掲載したものを中心に紹介。街道についても主なもののみ掲載

戦国の城 一乗谷城でわかる 防御のしくみ!



絵図/前田光雄

観光ボランティアガイド一覽



お問い合わせ先

福井県観光ボランティアガイド連絡協議会
〒910-0003 福井市松本3丁目16-10 福井県職員会館ビル1階 (公社) 福井県観光連盟内 TEL.0776-23-3677

ボランティア名	予約可能人数	予約締切	料金 (ガイド1人あたり)	連絡先	受付時間	スタンダードコース	
福井・三国・あわらエリア	NPO法人 ボランティアガイド きたまえ三国	1名様より	1週間前	無料 (ただし交通費として1,500円)	旧岸名家 tel.0776-82-0947 fax.0776-82-7392	9:00~17:00 (水曜日休館日)	所要時間/各90分 ●高見順生家跡→金鳳寺→旧岸名家→三国湊町家館→旧森田銀行→元大野屋→松ヶ下西光寺 ●荒磯遊歩道→東尋坊→雄島
	丸岡観光 ボランティアガイド	1名様より	1週間前	無料	霞ヶ城公園 管理事務所 tel.0776-66-0303 fax.0776-66-0678	9:00~16:00	所要時間/60分 ●丸岡城天守前広場及び天守内1階
	ふくい観光 おもてなしガイド	1名様より	10日前	1,000円 (2時間程度)	(公財)福井観光 コンベンションビューロー tel.0776-20-5151 fax.0776-27-0700	9:00~17:00	所要時間/120分 ●養浩館庭園→福井城址→由利公正広場→ グリーフィス記念館
	福井市 歴史ボランティア バンク「語り部」	ガイド1人 につき、 2名様から	1週間前	無料(ただし交通 費として1,000円) 2時間以内(超える 場合は要相談)	歴史のみえる まちづくり協会 tel.0776-35-0855 fax.0776-35-0855	8:30~17:00 (月曜~金曜日) ただし祝日は除く	所要時間/各120分 ●福井駅→北の庄城址公園→内堀公園 →福井城址→天守台跡→御座下橋→福井神社 ●一乗谷朝倉氏遺跡
永平寺町観光 ボランティアガイド の会	要相談	1週間前	無料 (ただし交通費 として1,000円)	永平寺町観光物産 協会 tel.0776-61-1188 fax.0776-61-1186	8:30~17:30 (平日)	所要時間/60~90分 【60分】天竜寺→火薬局跡→お館の椿→ 撰取寺→昌蔵寺→蓮光寺 【90分】門前街→寂光苑【60分】吉峰地区→吉峰寺	
吉崎語り部の会	1名様より	10日前	1時間 1,000円 (7名まで)	あわら市吉崎公民館 tel.0776-75-1205 fax.0776-75-1205	9:00~17:00 (月曜~金曜日)	所要時間/60~120分 ●吉崎御坊跡→越前・加賀県境→鹿島の森 ●細呂木関所跡→のこぎり坂→吉崎御坊跡 ●藤の宿跡→国境名号→のこぎり坂→蓮如街道→吉崎御坊跡	
丹南 エリア	鯖江市産業観光 ボランティアガイド の会	1名様より	1週間前	無料 (ただし交通費 として1,000円)	(一社)鯖江観光 協会 tel.0778-52-2323 fax.0778-52-2324	9:00~18:00	所要時間/120分 ●JR鯖江駅→めがねミュージアム→舟津神社→王山古墳 →萬慶寺→誠照寺→西山公園→福鉄西山公園駅 ※近松の里めぐり、うるしの里めぐりもご案内します。
	越前かたりべの会	2名様から	1週間前	無料 (ただし交通費 として1,000円)	越前町商工観光課 tel.0778-34-8720 fax.0778-34-1236	8:30~17:15 (月曜~金曜日)	所要時間/60~90分 【60分】越前陶芸村(陶芸公園) 【90分】越前岬→鳥養岩→水仙ランド→梨子ヶ平千枚田 【60分】福通寺朝日観音→八坂神社
	越前市観光協会 ボランティア部会	2名様より	1週間前	無料 (ただし交通費 として1,000円)	(一社)越前市観光 協会 tel.0778-23-8900 fax.0778-23-8933	9:00~17:00 (月曜~金曜日)	所要時間/120分 ●総社大神宮→国分寺→引接寺→龍泉寺 →正覚寺→千代鶴神社
	南越前町今庄観光 ボランティアガイド 協会	2名様~ 50名様 まで	1週間前	無料 (ただし交通費 として1,000円)	南越前町今庄観光 協会 tel.0778-45-0074 fax.0778-45-0041	9:00~16:00	所要時間/60~90分 ●今庄駅→「町並散策」・「燦々城跡」・明治殿・ 昭和会館・若狭屋・京藤甚五郎家・酒蔵見学・ 板取宿・木ノ芽峠
	河野 北前船主通り 案内の会	1名様より	1週間前 (ただし都合が つかば受付 します)	1時間 1,000円	北前船主の館・ 右近家 tel.0778-48-2196 fax.0778-48-2195	9:00~16:00 (水曜日休館日)	所要時間/90分 ●右近家→西洋館→北前船主通り
奥越前 エリア	勝山市観光 ガイドボランティア クラブ	原則として 2名以上 から	1週間前	無料 (ただし交通費 として1,000円)	勝山市観光政策課 tel.0779-88-8117 fax.0779-88-1119	8:30~17:15 (月曜~金曜日)	所要時間/60~120分 【70分】まほろば→平泉寺 白山神社 【120分】まほろば→平泉寺白山神社→ 南谷発掘地 【60分】勝山まちなか名所旧跡 【要相談】勝山左義長まつり
	観光ボランティア ガイド大野	1名様より	1週間前	1,000円 (20名まで)	(一社)大野市観光 協会 tel.0779-65-5521 fax.0779-65-8635	8:30~17:00	所要時間/90分 ●結ステーション→御清水→七間通り→寺町通り →石灯籠地藏尊→武家屋敷旧内山家
敦賀・若狭 エリア	観光ボランティア ガイドつるが	2名様 以上から	1週間前	無料(ただし 交通費として 半日1,000円、 1日2,000円)	(一社)敦賀観光 協会 tel.0770-22-8167 fax.0770-22-8197	8:30~17:15 (月曜~金曜日)	所要時間/車で4時間 ●JR敦賀駅→氣比神社→崎宮(城跡)→ホレンガ倉庫→ ムゼウム館(入道の港)→敦賀鉄道資料館→みなとつるが 山車会館→水戸烈士の墓→氣比の松原→JR敦賀駅
	若狭町 みかたの語り部	1名様より	1週間前	無料 (ただし交通費 として1,000円)	若狭町総合戦略課 観光交流室 tel.0770-45-9111 fax.0770-45-1115	8:30~17:15 (月曜~金曜日)	所要時間/45~120分 ●JR三方駅→三方石観音→佐久間記念交流会館→見返りの松 ●JR三方駅→縄文博物館→西田梅林→海浜自然センター ●藤の里会館→舟小屋→レイボライン(山頂公園)→三方五瀧周遊
	若狭町 かみなかの語り部	1名様より	1週間前	無料 (ただし交通費 として1,000円)	若狭町総合戦略課 観光交流室 tel.0770-45-9111 fax.0770-45-1115	8:30~17:15 (月曜~金曜日)	所要時間/60~90分 ●道の駅「若狭熊川宿」→番所→旧逸見勘兵衛家 →宿場館(資料館)→松木神社→西口公園
	観光ボランティア ガイド 「若狭の語り部」	バスの場合 …5台位 (1台につき ガイド1~2人)	1週間前	無料(ただし 運営協力金と して1,000円)	松木憲司 tel.0770-52-2316 fax.0770-52-2316	9:00~17:00 (月曜~金曜日)	所要時間/120分 ●JR小浜駅→いづみ町→町並み資料館→ 八百比丘尼入定洞(空印寺)→常高寺→ 古い町並み(三丁町)→小浜公園

福井県内歴史系博物館一覽

※入館料及び休館日等については各施設までお問い合わせください。

施設名	住所	連絡先	開館時間
吉崎御坊蓮如上人記念館	あわら市吉崎1丁目901-1	0776-75-2200	AM9:00~PM5:00
あわら市郷土歴史資料館	あわら市春宮2丁目14-1	0776-73-5158	AM9:30~PM6:00(最終入館はPM5:30まで)
坂井市丸岡歴史民俗資料館	坂井市丸岡町霞町4-12	0776-67-0001	AM8:30~PM5:00(入館はPM4:30まで)
みくに龍翔館	坂井市三国町緑ヶ丘4-2-1	0776-82-5666	AM9:00~PM5:00(入館はPM4:30まで)
福井県教育博物館	坂井市春江町江留上緑8-1	0776-58-2250	AM9:00~PM5:00(入館はPM4:30まで)
福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館 ※朝倉氏遺跡案内ボランティア(遺跡内を無料で案内 ※4~11月の土・日・祝日のみ)	福井市安波賀町4-10	0776-41-2301	AM9:00~PM5:00(入館はPM4:30まで)
福井市立郷土歴史博物館 ※博物館ボランティア「とねりの会」(博物館横の養浩館庭園も無料で案内 ※要事前予約申し込み)	福井市宝永3丁目2-1	0776-21-0489	AM9:00~PM7:00(11/6~2/末はPM5:00まで)
福井県立歴史博物館	福井市大宮2-19-5	0776-22-4675	AM9:00~PM5:00(入館はPM4:30まで)
福井県立美術館	福井市文京3-16-1	0776-25-0452	AM9:00~PM5:00(入館はPM4:30まで)
福井市愛宕坂茶道具美術館	福井市足羽1-8-5	0776-33-3933	AM9:00~PM5:15(入館はPM4:45まで)
福井市自然史博物館	福井市足羽上町147	0776-35-2844	AM9:00~PM5:15(入館はPM4:45まで)
福井市美術館「アートラボふくい」	福井市下馬3丁目1111	0776-33-2990	AM9:00~PM5:15(入館はPM4:45まで)
福井県立こども歴史文化館	福井市東城1-18-21	0776-21-1500	AM9:00~PM5:00(入館はPM4:30まで)
福井県立恐竜博物館	勝山市市岡町寺尾51-11	0779-88-0001	AM9:00~PM5:00(入館はPM4:30まで)
勝山城博物館	勝山市平泉町平泉寺85-26-1	0779-88-6200	AM9:30~PM4:30(入館はPM4:00まで)
白山平泉寺歴史探遊館まほろば	勝山市平泉寺町平泉寺66-2-12	0779-87-6001	AM9:00~PM5:00(入館はPM4:30まで)
大野市歴史博物館	大野市天神町2-4	0779-65-5520	AM9:00~PM4:00(日祝はPM5:00まで)
福井県自然保護センター	大野市南六呂師169-11-2	0779-67-1655	AM9:00~PM5:00(入館はPM4:30まで)
鯖江市まなべの館	鯖江市長泉寺町1-9-20	0778-53-2257	AM9:00~PM5:00(入館はPM4:30まで)
越前町織田文化歴史館	越前町織田153-1-8	0778-36-2288	AM10:00~PM6:00(入館はPM5:30まで)
越前がにミュージアム	越前町厨71-324-1	0778-37-2626	AM9:00~PM5:00
福井県陶芸館	越前町小曾原120-61	0778-32-2174	AM9:00~PM5:00(入館はPM4:30まで)
越前古窯博物館	越前町小曾原107-1-169	0778-32-3262	AM9:00~PM5:00(入館はPM4:30まで)
越前和紙の里 紙の文化博物館	越前市新在家11-12	0778-42-0016	AM9:30~PM5:00(入館はPM4:30まで)
越前市武生公会堂記念館	越前市蓬萊町8-8	0778-21-3900	AM10:00~PM6:00(入館はPM5:30まで)
能楽の里歴史館	池田町稲荷12-1	0778-44-8006	AM10:00~PM4:00(土・日・祝のみ開館)(休館中)
北前船主の館 右近家	南越前町河野2-15	0778-48-2196	AM9:00~PM4:00
敦賀郷土博物館	敦賀市三島町1丁目八幡神社内	0770-22-1193	AM9:00~PM4:00
敦賀市立博物館	敦賀市相生町7-8	0770-25-7033	AM10:00~PM5:00
みなとつるが山車会館	敦賀市相生町7-6	0770-21-5570	AM10:00~PM5:00(入館はPM4:30まで)
若狭国吉城歴史資料館	美浜町佐祐25-2	0770-32-0050	AM9:00~PM5:00(12~3月はAM10:00~PM4:30)
若狭三方縄文博物館	若狭町鳥浜122-12-1	0770-45-2270	AM9:00~PM5:00(入館はPM4:30まで)
福井県海浜自然センター	若狭町世久見18-2	0770-46-1101	AM9:00~PM5:00(7/21~8/31はPM6:00まで)
若狭鯖街道熊川宿資料館「宿場館」	若狭町熊川30-4-2	0770-62-0330	AM9:00~PM5:00(冬期は変更あり)
若狭町歴史文化館	若狭町市場20-17	0770-62-2711	AM9:00~PM5:00(入館はPM4:30まで)
福井県立若狭歴史博物館	小浜市遠敷2-104	0770-56-0525	AM9:00~PM5:00(入館はPM4:30まで)
高浜町郷土資料館	高浜町南団地1-14-1	0770-72-5270	AM9:00~PM5:00(入館はPM4:30まで)
おおい町立郷土史料館	おおい町成和2-1-1	0770-77-2820	AM9:00~PM6:00(入館はPM5:30まで)
おおい町曆会館	おおい町名田庄納田庄111-7	0770-67-2876	AM9:00~PM4:00